北辰會雜誌

第四高等學校北辰會

第六十四號

明治四十五年六月二十四日發行

（非賣品）

北辰會雜誌第六十四號目次

論說

○讀書法の一種……八波其月
○十九世紀文明の特徴……浦井鍠一郎
○澤柳東北大學總長講演……
○色彩論……山田喜久良

文苑

○Das Bild des Kaisers.……筍生譯
○雜囊の塵芥……國友生
○コバルトの壺……山本白聲
○白日と月光と……鳴澤
○四高俳句會句鈔……

時言

○去るときに……A生

雜報

○叙任辭令……
○北辰會委員改選……
○先輩通信……

部報

○講演部……
○野球部……
○庭球部……
○遠足部……
○寄贈雜誌……

北辰會雜誌第六十四號

論說

讀書法の一種

（時習寮演說會に於て）　其月生

△温故知新　論語に「温故而知新」といふ語があります。種々の意に解して樣々の教訓に應用されませうが、私は今晩之を讀書法の一種に說明しようと思ひます。

吾々は新知識を得ようと、鵜の目鷹の目に新刊物を求食つて居ます。而して新刊物は實に汗牛充棟も啻ならぬほど澤山あります。で急行列車が幾多の小停車場前を、瀧笛一聲素通りするが如き態度で、先へ々々と驀進してゐるのであります。之も結構です。結構ですが「學而不思則罔」といふ弊が伴ひます。故に吾々は時々「温故」の必要があるのです。

數日前當地の師範學校で、石川縣教育會主催の教育品展覽會を見ました時、或一室で、明治初年以來の小學校教科用書類が陳列されてゐるのを見て、坐ろに一種の感興を催ほしました。絲、尖、錨……と書き出した單語圖――慥か明治八年頃の改板――を見ました丈けでも私の目の前に

は、村の矮陋な小學校、いろはの師、腕白小僧などの面影が走馬燈のやうに去來しました。次に小學讀本に目が觸れて端なく種々の記憶が再現しました。

△小學讀本　私共が兒童時代――明治十五六年頃――の教科書卽ち小學讀本といふのは、文部省の編纂で、今日から考へて見れば多分西洋の讀本の飜案らしうございます。「日本人は亞細亞人種の中なり」とか、「老いたる牝雞鶩の子を多く伴へり」とか、「狼來れり狼來れり誰か出でゝ救ひ給へ」とかいふやうな文句で、幾多の興味深い教訓話がありましたが、其の中で、當時は左まで面白い話とは思はなかつたが、其の後折々思ひ出しては忘れる事が出來無い、而して過日も亦思ひ浮べた小話があります。それは斯樣です。

麥畠の間に雲雀が巢をかけてゐました。麥は熟しました。雛は成長しました。或夕方親雲雀が歸つて來ると子雲雀が口々に申しますには、今日此の畠の持主が見廻りに來て、麥も刈入れ時分になつた、明日は人に刈らせようと云つて歸りました、其の前に早く立ちませうねと。すると親雲雀が答へていふには、まあわてるには及ばぬ。と翌日も例の通り親雲雀は朝から餌拾ひに參りました。歸つて來ると子雲雀どもが、今日復た持主が來て、明日は是非何某を傭うて刈らせなければならぬと獨言いて歸りましたと。親雲雀、大丈夫だ。と其の次の朝も復た早くから餌拾ひに出かけました。歸つて來ると子雲雀どもが、今日も亦持主が來て、これは愚圖愚圖してゐられぬ、明日は自分が來て刈らずばと云つて歸りましたと注進した。すると親雲雀が「左樣か？」と云つて夜明け前に家族一同飛び去りました。

と云つたやうな話です。意味深長なやうな氣がします。

何の氣なしに讀んだ文章や小說で、時折不圖思ひ出しては、恰も牛が食物を反芻するやうに、繰り返し繰り返し咀嚼し玩味して風味を覺える事が、定めし諸君にも多々あるでせうと想像します。「溫ヒ故而知レ新」とは斯樣なものではありますまいか。で私が思ひますには、一度讀んだ本、少くとも一度教はつた教科書だけは、成るべく賣り飛ばさずに保存して、餘暇があつたら時々引き出して見るも一興かと。餘白の手垢、振假名一字、圈点一つも愉快な追懷の種子となり、樂しい自叙傳の一節となります。況んや當時の文字下引線などは、經驗、知識、趣味などの程度を知り、今昔の感を催ほさせる事多大なものであらうと思ふのであります。

△曾我物語　頃日或動機に由て曾我物語を再讀しました。中學時代に讀んだ折には何とも思はなかつた所で此度は非常に面白く感じた個所があります。極めて簡單に紹介しませう。

彼の河津三郎が遺子一萬と箱王とは、五つと三つの年から曾我の太郎に養はれて、今は十一と九つとの腕白盛りとなりました。話變つて賴朝は、驕る平家を滅ぼして天下を心の儘に治めて居たが、或日工藤左衞門祐經が云ふやう、間近き御膝下に、幼くはありますが、末の御敵となるべきもの一二人居ります。賴朝、そは何者ぞ。祐經、伊東入道が孫共です。君聞し召し、急ぎ梶原召せとて召される。景季御前に畏る。急ぎ曾我へ下り伊東入道が孫共を具足し參れ、若し異議に及はゞ卽座に頭を刎ねよと嚴命ある。景季承つて馳せ下る。

ずつと話を端折つて、梶原、二人を具して鎌倉へ歸る。其の夜は深更に及んでゐたから、二人

を己が宿所に止めて、翌朝御前に伺候する。頼朝、嘸母も惜しみつらん、歎きつるかと仰せある。景季此の御言葉に取り付いて、さん候、母が歎き餘りに不便なる次第にて候、未だ幼き者共に候へば成人の程景季に預けさせ給へかし。頼朝、ならぬ、三歳の若を失はれ、剩へ女房まで取り返されて歎きの上の恥を見、加之由井が洞にて頼朝を討たんとした憎さも憎き伊東の嫡孫、如何あつても許す事は罷りならぬ、急ぎ由井が濱にて首刎ねよとある。主命なれば力無く、梶原二の句もつがずに罷り立つ。

斯くて由井が濱ては既に敷皮敷き、一萬箱王の二人を坐らせ、太刀取り堀の彌太郎太刀拔きそばめて後方に廻る。兄弟二人、西に向ひて手を合せ、臆せる色なく念佛申す。いぢらしともいぢらしい。

此の體を見て梶原景時、先づ御待ちあれ、拙者一應命請ひして見ようと、直ちに馳せて御前に伺ふ。主君、今朝より汝が子息源太景季が申しつれども預けず、汝怨むべからずと仰せられましたれば、力及ばで引き退く。

次に和田の左衞門義盛御前に畏り、これは己が功名、即ち衣笠城にて御命に代り奉り、主君を御世に立たせ申した其の功勞に思召し代へて曾我兄弟を御預けあれと迫る。頼朝、餘事は御分の所望を許すが此の事のみはさしおき給へと優しく出られた。義盛退く。

次に宇都宮彌三郎朝綱、若しやと思ひ伺候する。君御覽じて、今日の訟訴人は叶ふべからず、思ふ仔細ありと御氣色特に惡しかつたので、一言も發せで退出する。

次は千葉介常胤、龍の鬚を撫で、虎の尾を踏むも事による事に候、と前提して訟願する。君聞召し、御分は頼朝身に代へても餘りある程の大恩人、さりながら伊東が怨めしさは知りも給ひなんとて其の後は口を噤まれる。常胤重ねて地藏薩埵の第一誓願には、無佛世界の衆生をさへ救ひ盡させ給はんとやと議論する。君、それは如來に問ひ給へ、彼等は斬らで叶ふべからず。常胤遂に罷り立つ。御前伺候の人々も、今は是迄だと、皆落膽しました。

ところに現はれ出でましたのは武藏の國の住人、畠山庄司次郎重忠です。一期に一度の大事をこそと存じて是迄一度も訟訴致した事はござりませぬ、これ一つをば御免候へ。君の仰せには、此の事叶へぬ怠りに武藏の國二十四郡を進上する。重忠、某が以前賜はりて候ふ所領悉く返し參らせますゆゑ何卒彼等を助け給へ。君御返事にも及ばず。重忠膝を進めて、此の願御許しなくば重忠命生きても無益なり、御前にて首を召れ候へ、それ叶はずば淺間も御照覽候へ、重忠自害仕り候べし……。重忠が一期の大事と思召し、助け置かれ候へかしと、眞に思ひ切つたる氣色にて、高聲張り上げ歎願しました。

君つくづくと御思案ありて、さらば此の者共を助け候へ、但し御分一人には預けぬぞ、今日の訟訴人どもに悉く許す、と仰せ下されました。

斯くて曾我の五郎と十郎、當時の箱王と一萬とは風前の燈火にも比すべき危い玉の緒を繋ぎ止めたのであります。

諸君請ふ一考し給へ、梶原父子といひ和田の義盛といひ、或は宇都宮朝綱といひ或は千葉の介

常胤といひ、いづれも賴朝に取つては武功の士である、無二の忠臣である、忘れ難き恩人である、命の親ともいふべき者共である　かゝる者共が訟訴を聽かで何故畠山庄司が訟訴をのみ聽かれた？、私が中學時代に此の本を讀んだ時には、未だ左迄の考究は致さなかつたやうです。然るに此度再讀した時、思はず案を打つて快哉を叫んだのです。諸君の前で今更說明する迄も無い事ですが、人を助け又は人の世話をしようと思ふものが、我が寵を誇り、我が功を論じ、若しくは我が辯舌を以て名を成さんとする如き卑劣な心、一言にして申せば利己心を以て人を助け人を世話しようとしたらば、決して成功すべきものでは無い。犧牲的精神！、此の貴むべく尊ぶべき精神ありてこそ始めて岩の如く山の如く動かざる人の心をも動かし得るのであります。「重忠命生きても無益なり、御前にて首を召され候へ、それ叶はずば淺間も御照覽候へ、重忠自害仕り候ふべし」――此の言、及び「眞に思ひ切つたる氣色」――此の行ひがあつたればこそ寵臣梶原父子にも許されず、忠臣和田、宇都宮、並に千葉の介等にも許されなかつた訟訴を畠山一人に許されたのであります。

思はず話が長くなりましたが、小學讀本の雲雀の話といひ、曾我物語の命請ひの話といひ、小學校時代又は中學時代には左程深く感じなかつたのですが、頃日に至りて稍々眼光が紙背に徹したやうな氣がします。で諸君は一度讀まれた本――少くとも教科書だけ――は保存して、時折「故きを温ねて」以て新しきを知られん事を希望します。

△餘論　終りに、之は全く餘談ですが、賴朝公が、實際は畠山庄司一人の訟願を許されながら「但し御分一人には預けぬぞ、今日の訟訴人どもに悉く許す」と仰せられた所、流石は人の上に立つ人、否日本の大政治家たるの器量かと存じます。次に曾我兄弟が九死に一生を得て故郷に歸つた時、母をはじめ家族の驚喜、それは非常のものでした。一萬が乳母月冴といふ女房、庭上に走り出で、馬の口を取り「君たちの御歸り」といはんとて、餘りに周章てゝ「馬達の歸り給ふぞや」と呼はつたと書いてあります。筆者の機智にも今更ながら感心しました。

御清聽を謝します。（五月十七日）

十九世紀文明の特徵

（四高公開演說會に於て）

浦井鍠一郎

今日の演題は十九世紀文明の特徵といふのでありますが、歷史の史實といふものは一の原因あればこゝに結果が生ずる、而して其結果が次には原因となりて新たに結果を生ずるといふ樣な譯で、恰も長い鎖の樣なもので、これからが十九世紀これより前が十八世紀と切斷することは出來ない、丁度長い河の樣なもので、吾人は漠然上流 中流下流といひ居れども、さて河口から何哩何メートルまでが下流、これから上は中流だと、明らかにある地點を極め難いと同じ譯である、其故十九世紀の文明といふも、其原因が十八世紀に在るものが多い、十八世紀に播かれた種子が、

十九世紀に至り芽を出し成熟したものであるといふことを了解して置かねばならない。

十九世紀文明の特徴といへば種々ありますけれども一を概括的に一言でいはば科學の驚くべき進歩と、其適用及び其より生じたる社會狀態の變化といふことである。實に十九世紀は物質的文明の時代であります、これに關して英國のラッセルウオーレスといふ人はゼワンダーフル、センチュリイといふ書を著はして居ります、同氏は此書を更に省略してゼ、ワンダーフル、センチュリイ、リーダーと題し讀本の樣なものを出して居ります、此頃博文館であつたと思ふ「驚くべき世紀」と題して此譯書を出版して居ります、餘程面白い本故一讀されんことを御薦め致します。

偖此ヴオレース氏は、十九世紀の百年の間に出來た大發明大發見に比較する價値あるほどの大發明が、十九世紀以前にどれ程出來て居るかを調べて居ますが、十八世紀に出來た十九世紀の發明に比するに足る者といへば、たゞ一ッ蒸氣機關の發明であります、これは皆さんが御承知の通り、スコットランドのゼームスワットの發明にかゝりまして、十八世紀の最早末の一七七〇年のことであります。勿論かゝる大發明といふものは多くの場合に於て突然一人の人が發明するといふ譯には行きません、蒸氣力の如き太古の埃及歷山府の學者が知て居たと言ひ傳へ、近代にはニューコメンとかサバリーとかウースタアなどいふ人々が種々研究して居りますが、ワットに至りて之を大成した譯であります。但し實を申すとワットの製した蒸氣機關は鑛山に於て深い穴から水を汲み出すに用ひられたゞけで一般世人はそんな機關が出來て居るといふことは丸で知らない樣な事情であつたのです。次に十七世紀にはどうかといふと望遠鏡の發明であります望遠鏡が出來たお影で天文學は大發展を致しましたこれもオランダ人のリッペルスヘイとか、ヤンゼンといふ人々が熟心に研究して居ますが、實用的にしたのはイタリアのガリレオガリレイで、望遠鏡を以て天體を觀測した結果太陽の斑點だの木星の衞星だのを發見して居ます。それから獨逸の天文學者ケプラーに至りて益々立派なものになりましたが、其時分の望遠鏡といへば現今の雙眼鏡位の力より無かつたといふことです、それから十六世紀は如何といふに、十六世紀には一つも大發明といふものはありません、それも其筈です一五一七年にルーテルが宗教改革を唱へ出してからは、歐洲各國宗教的大騷亂の時であります、十五世紀には活版印刷術と云大發明がありますこれは誰れも知て居る通り一四五〇年獨逸のヨハングーテンベルヒの發明です。十四世紀には磁針の發明がありますこれが出來たから遠洋航海も出來る樣になりましたので、コロンブスのアメリカ發見、マガリエンスの世界週航も其結果です。十四世紀以前に於て以上のものと對抗するに足る發明といふはアラビヤ數字の發明であります、此は其實印度で出來たもので、アラビア人が採用して歐洲に傳はつたものでそれから數學が發達したのでありますそれまでの數字は現今では時計の盤面に名殘をとどめて居るローマ數字より外無かつたのであります此アラビア數字の發明の前にはアルフハベットの發明で、これは太古のフエニキア人が作つたものであります。

此の如く太古から十八世紀までの數千年の間かゝりて出來た諸發明を十九世紀の百年の間に於てより以上の大發明を續々やつて居ります、されば十九世紀文明の特徴はどうしても科學の進歩であるといはねばなりませぬ。

先づ第一にいはなければならないのは蒸氣船の發明であります　水卽ち河湖海は太古より人類にとりては必要なる交通道路でありまして古代の文明國は皆水邊に興て居ります併し近代に至るまで人間は風波を制禦することが出來ませなんだこれが歷史上重大なる關係を生じて居ります千二百八十一年我國に寇した十萬の元の兵は風濤に對する抵抗力を有しなかつた爲めにあの樣な結果に終つた次第です、當時の記錄を見ますと元兵の一部の我國に上陸したものに對して我兵は非常な苦戰をやつて居ります、殆んど禦ぎ兼ねました樣子が見えて居りますのです元の全軍が攻勢を取つて來たらと寒心する次第であります。是れと同樣なのが一五八八年英國に向ふた西班牙の無敵艦隊です、英國は颶風の御蔭で免れたのです、英吉利人は無敵艦隊の擊退を以て大なるプライドとして居ますが、中々威張れる譯ではないのであります、之と反對に一八五三年にアメリカのペルリが日本へやつて來たのは、彼れ蒸氣船を持て居たから、太西洋二千哩の波濤を犯して來ることが出來たので、蒸氣船の發明が出來なかつたらば、どうしても來ることは出來ません、ペルリが來なかつたなら恐らく德川幕府は瓦解しなかつたでしやう、そうすれば我國の事狀は大に今日とは違つたでありませう、蒸氣船の發明の影響それ大なるかなといはねばなりますまい。

偖原始時代の人類が、所謂丸木船を造りて水上を行くことを考へ出してから一八〇一年まで數千年の歲月に於て、船を前進させる方法は少しも進まないで、櫂と帆とより他に手段を持ちませなんだが、一八〇一年英吉利のテームス河に於て、始めて前世紀の末にワットが發明した蒸氣機關を船に應用して見たところが首尾よく動きました、それから蒸氣船の研究が始まり、六年を經てアメリカのロバートフルトンに至りて大成しました。此のフルトンといふ人は初めは美術家になる積りで修業のため倫敦に出て其時分有名であつたベンジャミンウエストを師として勉强したが、後土木器械工學を修め、英吉利からフランスに行き、英國佛國兩政府から種々補助を受けて蒸氣船を造らうと努力し、一八〇三年に至りて一隻の氣船を造り出し、之をセーヌ河に浮べた所、設計に誤があつたゝめ、美事に沈沒して仕舞ふた、因て其船を拾ひ出し、舊機關を用ひて新設計の船に裝置して見たるに、今度は沈沒は免れたれども中々思ふ樣に行かない、それで先生はまたアメリカに歸りて益々奮勵研究し、一八〇六年に至りて更に一隻の蒸氣船を造り出した、翌年の一八〇七年其試運轉をやつた所大成功で、ニューヨークを發しハドソン河を溯り、上流のアルバニイまで百五十哩の所を二十二時間で到着致しました、此船をクラーモント號といひ、之を以て蒸氣船の嚆矢とするのであります。

此時から四年前の一八〇三年には、英佛間の交戰が始まつて居ます、ナポレオンは此度は是非に英吉利に進入したいと考へ、ブーローニウー港に大軍を集めました、併し英國艦隊を擊破して陸軍を進めるだけの海軍力はナポレオンは持ちませんから、英國艦隊の目を偷んで短時間に上陸させることを工夫しなければならない、今日の樣な大きな船はないので、多數の運送船が入用である、其樣に船を多く集めることも困難なり、之に兵士を分乘せしむるには多くの時間を要する、とても尋常の方法では駄目であるは明かであるからして、ナポレオンは大きな筏樣のものを準備して一の筏に一大隊位の兵を乘せ一呼吸に英國へ押寄せやうといふ計畫を立てたのであります、

しかし是は結局ナポレオンの空想に終り、實行出來ずに終りました。此英佛間の距離は何程あるかといふに、ドーバーカレー間に僅々二十二哩であります、佛國のカレー海岸から英國海岸は能く見える是ドーバー海岸は白堊の絶壁であるから、日光に反射して白く判然と見えるのです、ナポレオンは英吉利の空を睨んで余が若し六時間海峽の海權を得たらんには、英國を征服する一擧手の勞のみと切齒扼腕したといふことであります、如何にも歐洲大陸は殆んどナポレオンの手中に在り、ナポレオンの力の及ばざるは獨り英吉利のみ、それが僅二十二哩の海に妨げられて手が出せぬとは殘念に堪へなかつたでありませう。偖フルトンはナポレオンに面會し、彼が熱心計畫しつゝある蒸氣機關を例の筏船に据え付けんことを勸めましたが、ナポレオンは失敗のフルトンを知て居るだけです、神ではありません三年後のフルトンを識らないのです、叱りつけて其勸告に應じませなんだ、嗚呼フルトンの成功が實際より二年前に出來て、ナポレオンが直に蒸氣船を造らしめ、英吉利へ向つたらば如何でありませう、百のネルソンありとも帆前船の軍艦では仕樣がなかつたでありませう。

一度端緒が出來たら後は改良發達だけです、十二年後には造船術も大に進み一八一九年にサバナーといふ船はアメリカサバナー市を發して露國のペテルブルグまで行つて居ります、是が蒸氣船の遠洋航海の始で、二十五日を以て太西洋を横斷しました、而して造船の上で大革命といふべきは、瑞典の人でエリクソンといふ人が螺旋推進機を發明したことであります。是迄の蒸氣船は外輪氣船といつて兩舷の中央左右に大な水車樣の車があつて、此車の蒸氣力で回轉して水を泳いで進んだものです、成程これは誰でも最初に考へ付く方法でありまして、此裝置のある氣船を外輪氣船（パットルスチームシップ）と申します、今度は船尾に螺旋を作りこれを蒸氣力で回轉するので、之を暗輪氣船（スクリユースチーム）と名けます。翌年に此裝置を施した氣船のグレイトウエスターンといふのが約千四百噸の大さでありますが、リバプールニユーヨーク間を十五日で達し、世人をして喫驚せしめました。其翌翌年の一八四〇年に英國のサムエルキユナードといふ人がキユナード氣船會社を創立し、太西洋定期航海を開業して居ります、此社船で始めてアメリカへ航行したがブリタニアといふ船で、キユナードは世界に於ける遠洋定期船開始の功を以て貴族に列せられて居ります。四十七年にはハンブルヒアメリカ線五十七年には北獨逸ロイド線六十二年には佛國定期線が出來太西洋に於て大競爭が始まつて來ました。

此競爭は殆んど底止する所を知らずといふ勢で、或は速力で、或は船體の堅牢安全の點で、或は設備の點で、激烈な競爭をやつた結果、二十世紀に至り所謂巨船といふものが現はれる樣になり、一九〇七年に出來たルシタニアが巨船の嚆矢で、三萬二千噸五日以内で太西洋を横斷しました、仕舞にはどんな船が現はれて來るかと思はれたのですが、先頃のタイタニックの沈沒は大なる教訓となり、此後はまた多少趣が變つて來るだらうと思はれるのであります。

以上の造船の發達と併行して、他の工學機械學の發達を忘れてはなりません就中舶用機關の進歩は驚くべきもので三重膨脹機關で一枚のノートペーパーを燃燒した火力が一噸の重量を一哩の距離に運び得といふ法螺の樣な度まで進歩して居るのであります。

横濱からバンクバーまでは十三日、ホノルル、經由で桑港へは十七日かゝれば行かれます、言ひ換ふれば太西洋も大平洋も縮小しました、是れ十九世紀文明の賜であります。

次に鐵道の話に移ります、是も蒸氣船と同樣漸次改良に改良を加へて出來たのであります、一番の起原は英吉利の鑛山で石炭を運び出すに車輪の摩擦を減ずるため、木のレールを敷設して馬に牽かして見た所非常に結果が良いので、次に木のレールを鐵に改め、それから馬の代りに蒸氣を用ひたいと研究し始め、一八一三年にウキリヤムヘツドレイといふ鑛山技師が、ニューカツスル附近の鑛山で機關車を作りましたが、十分の成功ではありませなんだ。それでジョージスチブンソンといふ人が更に工夫して一八一四年に機關車を造り出したが、一時間一哩の速力で動いた、それから力を得て益々奮發して改良を加へ、一八二五年にストクトンダーリントン間に始めて鐵道を布設し旅客の輸送を始めました、普通に之を世界に於る鐵道の嚆矢となし、一時間に十二哩乃至十五哩の速力を出しました。スチブンソンは益々改良を怠らず、一八三〇年に開通したマンチエスターリバプール間の鐵道では、一時間に三十哩といふ高速力を出しました　これで試驗時代は終りまして、跡は日に日に新なりと云ふ勢を以て進歩し、アメリカなどでは一時間に百哩の速力を出すも近き將來にありといふ勢だといふことであります。また話が歷史に移りますが、彼のナポレオンが一八一二年露國進入に敗れ、パリーに走り歸つた時には、晝夜兼行でロシアからパリー迄約一千哩の距離を五日で走つたといひます、すると一時間に八哩九哩を馳せて居る割合になります。當時のナポレオンの大勢力を以て爲したことであれば、それこそ人力のあらん限を盡して居るのでありますが、それで此の如し、百年間に於ける文明の進歩驚かざるを得んやです。日本では明治五年に開通した新橋横濱間が鐵道の始めであります、何んでも明治三年頃から起工したのでありますが、伊藤博文さんが工部卿で技師から土方の工夫に至るまで、約三百人の英人を雇ひ入れ、全然西洋人の手で布設したのであります、今から見れば滑稽な譯で、鐵道の御役人は丁度、今の海軍大禮服の樣な金モールピカ〳〵した制服を着け、一日に二回乃至三回の發車で、チョン髷の旅客は、恐る〳〵切符賣下を御願ひするといふ樣の次第で、乘客が車に入いつた時は、車へ錠をおろすといふ、四人馬車同樣の取扱であつた、これ瀛車に乘りつけない旅客が、途中で飛び出したり、あまり速力が速いので、目を廻して轉がり墜るなどいふことのない樣、危險豫防の爲であつた。

此鐵道が出來て世界は事實に於て縮小されて仕舞ふた、十九世紀文明の一特徴といふべきものである。

蒸汽船と鐵道とが十九世紀に發達した交通機關の兩大關で之に次で自轉車が出て自動車が出來た、此二者の發達は十九世紀に於て一八八六年に空氣入のタイヤの發明ありて後始めて今の型になつたものである。

極く簡單に通信機關の發達を述べますと一八三三年獨逸のガウス及びウエーベル、合衆國のモールス及びホイートストンの努力で、電信が出來上つた、次には之を海底に布設したいといふ考へになつて、一八五〇年に英佛のドーバー海峽に海底電信が布設された、それで今一歩進んで太西

洋に及ぼし度いとなるのは當然の順序であります、乃ちアメリカのサイプラスフィールドといふ人が太西洋電信會社を建て、合衆國英國兩政府の補助に因り、一八四〇年以來計畫に着手し、一八五八年に至りてニューフハオンドまで出來し、ビクトリア女皇から合衆國大統領へ宛て最初の通信が發送されました。然るに三週間を經て不通になつて仕舞つた、そこで更に八年間の努力奮鬪の結果、一八六六年に至りて英米の海底電線が成功した、前後二十六年間の不撓の精神の結晶です、此等の事を書いたものを讀むと、自から涙の流るゝを覺えます、諸君は是を一場の談話と聽き流さず能く考へて戴き度い。

電話は電信に比して遙かに遲れて居ります、一八六〇年に出た獨人のライスの考案に基き、一八七六年アメリカのグラハムベルの改良に因り、大成したものであります、十九世紀の末一八九六年に、イタリアのマルコニが無線電信を發明しました。

通信機關の最も普遍的なるは郵便でありませう、現今の郵便制度の祖はイギリスのサーローランドヒルであります、此の改革まで英國の郵便制度は實に不便な不整理のもので、郵便賃は距離に因て、重量に因て、書狀の形狀に因て違ふたのみならず一枚の紙に書くと一枚以上の紙に書くとで違ふたものであります、それで普通の書狀の郵便稅が六ペンスでありまして、我貳拾五錢程です、是は平均した話で、ロンドンからアイルランドの北方へ出す時は七拾五錢もかゝつた加之其時分の郵便に關して二つの大なる缺陷がありました、其一は「フランキング」といふことで、今日我國會の議員が無賃乘車券を以て年中瀛車の一等のたゞ乘をやつて居ると同じ意味で國務大臣及び國會議員は無賃にて書狀を發送する特權を與へられて居つたので、其濫用が非常な者であつた。つまり有權者は狀袋の隅へ署名すれば無賃で行くので、權利者の朋友知己は一寸一筆御願ひ致し度いと賴むのでありまして公德心に訴へて之を拒むものは殆んどない、むしろ自慢でいくらでも署名してやつたものです。其爲め郵便局が是等の無賃郵便を取扱ふ數は中々多かつたのであります、如此郵便局が無賃で運搬する費用は轉じて有賃郵便物へかゝつて來る、無賃郵便が多くなるだけ、有賃郵便物の賃錢を高めなければ經濟が立ち行かない、此時分の郵便賃が高かつたのは其爲めであります。他の弊は「スマッグル」が行はれた、普通「スマッグル」といへば關稅を免れんとする密輸出入のことでありますが、手紙の「スマッグル」といふのは先年金澤で何でも御用が信書を配達したゝめ、郵便規則に觸れて所罰されたことが新聞に見えましたが、あれを大仕掛にやるので、運送店なり乘合馬車の營業者などが、信書を配達するのであります、此「スマッグル」が流行した譯は、政府の郵便が高いからもつと安く配達して貰ふのが一理由でありますが、主因は前に申した樣に一枚の紙に書いたのと二枚の紙に書いたのとは餘程賃錢が違ふので、郵便局の役人は無暗に信書を開封して調べる弊があつたゝめ、人情として之を厭ふて政府の郵便に托せぬ風が大に行はれたのであります。

そこでヒルは當時の郵便制度の弊を見て、改革意見を持て居ましたが、此ヒルをして愈々極力改革をやらうと決心させた名高い話があります、それはヒルの親友のコレリッジといふ人が、ある日散歩に出ましたが、一人の婦人と郵便配達人とが何か爭つて居りました、だん〳〵樣子を聞く

に、其婦人の兄で他鄕に居るものから、婦人宛の郵便が來たので、配達夫は此書狀を宛名人に渡し、其賃銀を受取らうといふ（此時分は受信人が賃銀と引換へに郵便を受取るのです）婦人は受取りたいが錢が無いから、手紙を持て歸へつてくれろと問答して居るのです、聞けば郵便賃は一シリング（我五拾錢）だといふのですコレリッジは此婦人は他鄕に在る兄から手紙が來たことであるから定めて一刻も早く讀みたいであらうに、僅か五拾錢の金の持合がないために手紙を受取ることが出來ぬといふは殘念であらうと同情に堪へず、婦人に代りて五拾錢の賃錢を配達人に渡し手紙を受取て之を婦人に與へました。コレリッジは婦人が大に感謝するであらうと思ひたるに、これは意外婦人は配達人の去るのを見送つて居ましたが、突然コレリッジに向ひ、御親切は有難いが、貴方は無駄な金を御使ひなすつたといふのです、コレリッジは驚き、委細の事情を訊ねたるに婦人の答はこうです、私は兄と兼て打合せをして居るのです互に無事を知らせるには白紙を封入して送るようにしてあります、今配達人が渡した兄の書狀を手に取りて透して見たに白紙でありましたから、兄の無事なことは知れました、手紙を受取る必要はありませんに因つて、受取ることは出來ないと主張したのです、あなたは此事情を御存じないために、みすみす五拾錢の御損をなされたのですとコレリッジは此話を聞いて呆れ、珍談として之をヒルに話した、兼て郵便制度改革の考案を持たヒルは大に感動しそれから非常の熱心を以て改革論を唱へ、一八三九年政府は一ペニィ郵稅案といふものを議會へ提出しました、全英國内に配達する普通の書狀は一ペニィ（四錢）の均一稅となさんとする案であります、議會では反對論が中々盛んでした、下院では名士ロバートピール、上院ではウエリントン公爵が反對論の中堅でありました、其議論の要點は郵稅を突飛に下げる時は、政府の收入に大なる缺損を生ずべしといふのであります、之に對するヒルの說は一通の書狀を運搬するも百通の書狀を運搬するも、之に要する經費は違ふことなし、郵稅を下げれば差出人が增加するを以て、所謂數でこなす流儀で決して歲入に缺損を來たす心配なしといふのであります、英國の輿論は之に大賛成の意を表し、議會が此案を通過する樣大運動をやりました、それで議會も輿論に服從して此案を通過させ、一八四〇年一月を以て實行することに決しました。ヒルの豫想は的中して、郵便物は激增を來し、此改正迄は一人一年の書狀發送は四通の比例でありましたが忽ち二倍三倍四倍となり、一九〇〇年の統計では、英人一人一年の發送は五十六通と云ふ大進步を示して居ります。

一八四〇年の末英人のカルマーといふのが郵便切手を發明したのでありますそれから約三十年後一八六九年アメリカに於て郵便端書を用ひ始めた、今より僅か四十餘年前です

一八七四年獨逸の中央郵便局長インリヒステッフハンの發議に因り、萬國聯合郵便會議を開き、二十二國が出席して居ります、後四年一八七八年第二回會議がありましたが、此時には日本も參加して居ります、瑞西のベルン市が聯合の中央局となつて居ります。

以上で十九世紀の特徵の一端である、交通々信機關の發達の御話は終りました、最早時間もありませぬ故今日の御話は是にて止めます。

澤柳東北大學總長講演

五月四日至誠堂に於て澤柳東北大學總長の講話を聞く。左に其の概要を記す。

第一、學校とは如何なる者なるか。學校は理想的の小なる社會である。世が進歩し文明極致に達するならば其の社會にては道德道理が最上の權力を有する者たらねばならない。現今は道理必しも權力ではない、隨分無理が通り不合理が働く。現代の勢力は多數であり、富である。此れ果して理想的の社會であらうか。富の力ある必しも不可ではない、然し理想の社會にては富に與ふべき地位を與へて、道德正理が最高の權力を有する者でなければならない。現在にては只學校のみが此の道德司配の區域である。故に學校は單純なる模範的社會、文明の極致を体現した者である。之を應用の方面に見れば苟も正道と見る所は例へ一人の聲にても之を用ゐ、不當と見る所は全校一致の叫にても斷乎として之を退けなければならない。之れオーソリチイの取るべき方針である。今日多數の學校はあるけれども十分此の理想の表はれて居る者はないと思ふ。之れ學校管理者の思ひ至らざると學生の不注意とに因由するものである。

第二、高等學校教育の價値。大体より考ふれば高等學校教育は大學教育よりも重大なる意義を有して居る。今法科に就て考へて見るも法律政治を學ぶには高等教育を受けないでも大した相違はない筈である。然るに其の卒業生には大に差異がある。其處には何等かの理由があらう。一は種も違ふが其の最も大なる原因は高等學校教育の有無と云ふことにある。醫科大學と醫專、工科大學と高工、農科大學と農林學校、此等の卒業生の内に存する差異も之に依つて說明することが出來る。此の差は簡單な一例を以て大部分を推すことを得るのである。例へば語學の力といふ一事に就て考へて見ても、私立の大學では大に其の力が劣つて居る。學校ではそう大したこともないが卒業後は語學の力に依つて大に進歩の速度が異ふ。其の他普通教育を深くして居ることが大學卒業生の價値ある所であつて、眞劍に勉强すべきは實に高等學校時代である、何となればそは基礎であつて、基礎さへ確實であつたならば其の上に建てられる建物は容易である。專門知識の不足は卒業後之を補ふことを得るけれども普通教育の力は已に粗惡な建物を建てた後に再び礎を作らうとする樣なもので到底不可能な事であるからである。高等學校での油斷は永久に取返へしがつかなくなる。成る程高等學校は踏み段である、然し此の踏み段たる誠に大なる意味を有するのであつて大學出身者中に才能の差別あるは固より天賦の然らしむる所もあらうが主として高等學校生活が之を說明するのである。

第三、現代教育制度の欠陷、今日の教育は大學より中學に至る迄主として生徒の記憶力に訴へて居る、教ふる者も學ぶ者も共に判斷推理よりも記憶を恃として居る。アメリカのツウィングと云ふ大學の總長が日本の教育は判斷理解研究心を起す物を自分で觀察し事物に徹底したる理解を得るよりも雜多の事を記憶につぎ込む、此は漢學の影響を受けし者らしく、支那にても印度にても記憶し暗誦すると云ふ事が東洋人の通有性らしく見ゆと書いた。或は然りであるかも知れない。日本には學者識者愛國家慷慨家はあるけれども思想家がない。哲學者を以て自ら標榜する人すら

甚だ淺薄にして明白なる事理を論じて憚る所なき有樣である。西洋では文學者は勿論科學者にも實業家の中にも大思想を見出すのである。日本人全体が此の無思想を以て甘じて居るのであつて、國民一致此の弊に陷つて居るとすれば學生に此の事あるは或は當然の事であるかも知れない。然し力めて此は除去したい者であると思ふ。

第四、高等學校學生の名譽。高等學校學生の名譽としては我は高等學校學生なりと云ふ其の名が直に其の人の名譽である、日本の青年中に選り拔かれたる少數者と云ふ自覺がなければならぬ。選拔されたる少數者、其の名自身は非常なる誇ではあるまいか。そして如何なる言動が之を傷くるであらうかと云ふ事は諸君の判斷に任す。

第五、高等學校學生の特權。卒業したならば大學に入り得るといふ事は特權である。然し夫れ以上に意味ある特權がある。先づ學生は日々天賦の良知良能を啓發しつゝあるのである。此の特權は學生以外の何人も有し得ないのである。固より社會に立つた後も國家に貢献し社會に盡すと同時に己の良知良能を磨き得ない事はない。然し其は眞に自己を向上せしめ得ると云ふ程度には如何うしても至り得ない。第二の特權は理想に專らなり得ると云ふ事である。學生時代には空想と稱せらるゝ程に己の想を專らにすることが出來るけれども愈々社會に立つと現實の問題に追求され到底學生時代の如く之を無視して居ると云ふ樣なわけには行かぬ。然るに今日の學生は意氣銷沈せりなど言はれるのは實に自ら學生の特權を放棄するからである。何も徒に空理空論を事とせよと言ふのではない、然し取越苦勞などして純潔なる思想を汚したりするは斷じて不可である。己のなすべき課程を完全になし而して理想を高く抱いて居たならば決して空理空論に陷ることなく、愉快なる學生時代を過し得るだらうと思ふ。顧れば學生時代は實に愉快なる經驗であつた。然るに多くの學生は反つて現在を苦痛として他日成業の後に愉快を得ようなどゝ考へて居る。固より成業の後に愉快を得ることも不可ではないが種々雜多な事情に追はれないで自由に己を磨き得る學生時代は眞に愉快なものではあるまいか。殊に高等學校時代は中學の無我夢中なるなどに比べて大に思想も向上し、世界人生宇宙などに就て思慮をもめぐらし一面生活問題などにも遠つて居るから人生を通觀して最も愉快なる時代であらうと思ふ。大學でも固より生活問題などに捕はるべきものではないけれども二三年後には逢着せざるべからずと云ふ考は到底奪ひ去ることは出來ないと思ふ。然るに今の時代から斯る問題に頭を勞する樣なことがあつたならば其は學生時代の特權を自ら放擲し活潑々地の元氣を喪失するものだらう。

第六、責任。二千人の大學卒業が三十年續けば六萬人となる。此の六萬人は六千萬の同胞を指導し帝國を擔ふべき使命を佩びて居る者である。此の以外に日本の進步發達の原動力となる者は多くない。然るに此の六萬人が衣食に汲々し卒業後の事に屈托する樣であつては他の五千九百九十四萬人は如何にして生活をなし得るだらうか。一身一家の事の如き大學を出る樣な者の玆には自ら解けて橫はつて居る。年々二千人の卒業生の中に左程ならざる人物も豫想することが出來る。故に諸君の或る者は或は三千人に一人、何萬人に一人たる者であらう。國の偉大であると云ふは境土の大民衆の大富力の大ではない、實に大人物の存在であると誰かも言つた、此の大人物、そ

は何處に求むべきか、私は之を高等學校學生中に求める者である。今の時代に於て最も眞面目誠實なるのは此目的に適ふた人であらう。責任の大は數量的に明である（A記）

色彩論

山田喜久良

吾人が物体の存在を知り是を識別判斷し得る感覺の大部は視覺に依らすんばあらず總ての物体は空間の一場所を占有すと雖も何を以て相互を區別見解し得るや觸覺に依らされば認識し得ざる物体例へば空氣の如き物の其中に他の瓦斯の混合したらんには其儘視覺に依て是れを識別する事難からん是等視覺に依て物体を認知し得る原因となるへき要素は他ならす即ち其物体の發する處の色彩に因る

物体の形狀は觸覺に依て認知し得ると雖も眼を以て是を認知識別せんには此色彩を措て他に信賴すへきもの一もなし

然るに此色彩とは如何なるものなるや則ち種々なる色の光の結合加ふるに其物体の面の平滑及ひ粗鬆の度合に名つけたるに外ならず空間に家あり樹木あり机上に書籍ありと視覺に依て認むるを得るは即ち物体各々獨特の色彩を放つか爲に是等を他物より識別し得

然るに同等の色彩を放つ物体は相混合すとも是を區別見解する事能はさるは前にも云ひしか如く空氣中に石炭瓦斯あり、炭酸瓦斯ありとも個々別々に見分け能はず、水中に砂糖を溶解し或は食鹽を溶解し或は近年物騷なる酒の中にメチールアルコールを溶解するも是等は眞水或は眞正酒と同色彩を放つか故に眼を以て是等を識別し得ず、斯くの如き物体に至りては是を視覺に訴て認知し得へき狀態に變するに非らされは各物を區別し能はさるなるへし、故に眼に見えざる物は色を有せず、色彩を放たさる物は眼を以て視覺に訴へて判別認知する事能はさるなり

然れは色と稱し得るものは眼に見えざるへからざるは勿論にして物体を形容するに其色を以てするは最も了解し得る方法なり然るに眼に見えざる物及ひ物体に非らざるものにまで殊更色を附して恰も見ゆるか如く其了解に便せしむる事あり例へは音色、美聲、青い息、虹の如き吐息、青年、赤貧、赤心、淡白なる味、腹の黑い人、潔白なる行爲等の如く或は其色に依て其動作等の諷刺をなす事あり例へは警察署前の街燈には青硝子及び赤硝子を挿入す是れ此處に來る者は青くなり或は赤くなるに依るならんか、赤ン坊の取扱をなすに依り產婆の街燈には赤硝子を用ゐ、垢落す湯屋の硝子窓は赤色即ち赤を通す、勸工場の七色の窓硝子は何ても色々ありならんか、汽車、汽船等は色燈を用ゐて夜間の信號とせり

總て眼に見ゆる物は自ら光を發するとは限らず太陽、恒星及燃燒せる物体等は自ら光を發するとも其他の物は然からず、此自ら光を發する物体を自光体と稱し其他の物体は此等自光体に照らさるゝに非らされは見る事能はさるに依り是等多くの物体を暗体と稱す、此等自光体たり暗体たるとを問はず吾人か見ることを得る即ち吾人に光を送る物は是を光体と稱す

色覺に於て標準となす色は太陽の光線なり是を分光器に依て觀れば赤、橙、黃、綠、青、藍、菫等の七色より成立す、卽ち是等自光体の光は無數の色の光の混合より成立するものにして各色によりて生する無數の細隙の像か並列するなり、此七色を相混すれは白色となる依て白色の光は七色より成立することを知る、今太陽の七色の中赤色を遮りて殘六色のみを集むる時は青綠色に見ゆ、又青綠色のみを遮りて殘色を集むれば赤色に見ゆ、故に此赤色の光と青綠色の光とを相混する時は白色とならざるべからず尙二色相混して白色となるものあり右の外、橙と青、黃と藍、黃綠と菫の二色組の光は矢張り白色に見ゆ斯くの如く二色相混して白色となる色を互に餘色をなすと云ふなり、

赤、綠、菫の三色は適當に混ずるときは白色ともなり其他此三色よりして總ての任意の色を表し得るが故に此三色を原色と名つくるなり、卽ち此世界に存在する幾千種の色は此三色の任意の量より組成されて生ず例へは原色の三色が結合は最初に六種となり更に各々を結合せは四十五種の色となり此四十五種か互に結合せば九百九十種の色となる斯くの如くにして生したる色には各各名稱を付せざるべからざれども幾萬の色に各特名を付するは甚だ困難なり、化學的命名法にては各々名稱を付し得れども之れ色名にあらざればなり、依て其の中の少數の物のみに附名す例へは一B赤色、二Y赤色、一R紫色、二R紫色、三B紫色、四B青色等の如く同等の赤色にても帶藍赤色或は一Y赤色より二Y赤色は黃味を多量に含むか如し、其他複雜なるものには其獨特の色を現はす物体の名稱を付す例へは菫色、煉瓦色、櫻色、桃色、オリーブ色、ダーリア色等の如し、

斯く種々の色の光の混合より成立する時は是を複光と云ひ若し單一の色の光より成る時は是を單光と云ふ

現今石炭瓦斯の副生物たるコールター中より製し得るアニリン色素の發見されてより人工にて得へき色の數を非常に增加し天然の色彩を擬するに甚だ好都合となれり彼の往古より有名なる印度藍の如きは廉價なるアニリン色素の爲に壓倒せられて印度唯一の財源も漸々衰微し印度國財政上大恐慌を來たすに至れり

物質が各特種の色を現はすは受けたる光を吸收或は反射するに基つく例へは青色に見ゆる物は自光体より七色の光を受けて青色の光の大部分を反射し其他の色の光の大部分を吸收す、赤色に見ゆる物は赤色の光の多量を反射す、卽ち多く反射する色の光が眼に見ゆるなり、白色の物は總ての光を一樣に反射するに依て白く見え是に反して總ての色の光を悉く吸收する物は黑色に見ゆ

然るに同一の物質にして是を照らす自光体の光の種類に依て其見ゆる處の色を異にするものあり、朱の如き日光に照して赤色に見ゆる物がナトリウム焰を以てする時は暗黑色に見ゆ、是れナトリウム焰より來る光に朱の反射し得へき赤色の光を有せされはなり、日光に照して見たる色にして瓦斯光、電燈光或は石油燈光にて見るの際其色の異なること、夜中に買ひたる物の色が白晝に見し時に其色の異なる事屢々あるが如きは其物質の反射し得へき光を其照らす自光体に有せされはなり白晝見し赤或は樺色等は日暮るゝに從て黑味を帶ひ是に反し綠、淺黃等の白晝餘り明ならさりし色の却て明らかに見ゆ、是れ日暮には太陽光線中の赤色光を大空中の雲が大部吸收する

に依り地球に來る赤光は甚た少量となるにあり而して暮方の西空の雲は更に少量の赤光を反射するに依り赤く見ゆ、遠目にて見ゆる色にして近つきて異なるは光の混合と同理なり、例へは青と綠とを細かに市松に貼り混せたるものを遠方より見れは淺黃に見へ、赤と青とを極細に市松に貼り混せたるものを遠方よりは牡丹色に見ゆるか如し

此等は不透明体の場合にして透明体に至つては光を透過す、彼の赤硝子の如く日光を透過して見るに赤く見ゆるは赤色の光を通過し其他を吸收するに依る、近年發見されたるラヂウムの鹽は自ら光を發射する性あり此光を硝子に通すれは硝子は紫、黃、褐或は鼠色を呈す又鹽化ナトリウム若くは鹽化カリウムの如きアルカリ鹽は青色となる、コボルト硝子及ひ藍の溶液はナトリウム焰の黃色の光を吸收す

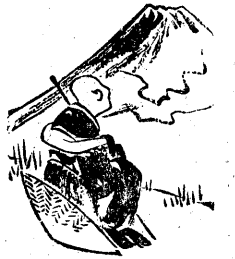
兎に角物質に特有の色を現はす理は透明体、不透明体に關せす其特有の色の光を多量に反射或は通過せしめ、見へぬ色丈け吸收するに依るなり

光の混合と繪具の混合とは其趣を異にす、互に餘色をなす二色例へは黃色の光と藍色の光とは適當に混合すれは白色を生すれども繪具の場合には然らす、則ち黃色の繪具と藍色の繪具とを混合するときは綠色を呈す其は黃色の繪具は重に青、藍、菫等の光を吸收して其餘を反射し、藍色の繪具は重に赤橙黃等の光を吸收して其餘を反射するものなれは此二色を混合するときは綠を除きて他の光を吸收するを以て綠色を呈するなり即ち投射する光は淺く物質内に入り是が爲に吸收せられ何れにも吸收せられさる光と反射せし光と混して謂ゆる混合の色を生するなり

石油より反射する光を望めは美麗なる青藍色を呈しフリュオレシーンの溶液は鮮美なる綠色を呈し、ヱオシン、硫酸キナイン等の溶液は藍色を呈し、フェナンスリンの溶液は青色を呈す是等の現象を螢光と云ひ、硫化カルシウム、硫化ストロンチウム、金剛石等を暫時日光に曝して後是を暗室内に移すときは薄き青色の光を發するを見る此現象を燐光と云ふ、螢光は燐光の如く永續するものに非らすして入射光線を遮きれば直に消滅す。

此等色の感覺を吾人の眼が受くる作用は眼中に或る三個の化學的成分あり三原色か各獨特に此成分を興奮せしむるにあり此成分の興奮力に强弱あり即ち色盲なる者は絕對に或る色を感せさるには非らす唯此成分が興奮力の微弱なるか爲なり、色盲には金色盲とてすへての色覺に弱きものあり又は一定の色覺の弱き所の部分色盲とあり部分色盲とは赤色盲と綠色盲とあり而して是等色盲を分ちて三色盲、赤色盲、綠色盲及ひ二色盲是なり、色盲は概して男子に多く女子には稀なり、實際職務上檢査せさるへからさるは鐵道員及ひ海員にして赤旗、綠旗或は赤燈、青燈を用ゐて相圖をなすものにありては最も必要なりとす。往時光は發光体か絕えす光素と名つくる微小なる物体を發射する現象なりとし此光素か眼中に入る時は視覺を起すものなりとせり、是を光の微塵說と云ふ、然るに中頃、光の波動說を唱道せる者あり現今にては此波動說を以て學說を完成せり、そは光はエーテルと名つくる一種の媒質の波動に基つくものなりとせり、即ち宇宙到る所エーテルと稱する輕微稀薄にして彈力に富める物質ありて眞空中或は物質中にも瀰漫す、光は發光体の分子の振動エーテルに傳はり是に横波を生するに依る所の現象にして其波動四方に傳播して吾人

の眼に達する時は光の感覺を生ず、吾人か音の高低を感するは音波の波長の長短に依ると同樣光波も亦波長の長短によりて眼に色の感覺を生せしむるにあり而して最も長き波長を有する光線は屈折最も小にして最も短き波長を有する光線は屈折最も大なりと結着せり　（完）



文　苑

Das Bild des Kaisers.

ウイルヘルム、ハウフ作

（一）

二三年前、九月のこと或る素晴らしい好い御天氣の日に、フランクフルトからスツットガルトへ一週に二度づゝ通ふ急行郵便馬車に二人の青年が乘つて居た。其の内の一人は、ダルムスタットの直ぐ前の宿場から乘つたのだが、其の着飾つた風采や又た先客の傍に腰掛けた時の挨拶振りで、偶然とすると隣席へ掛けた奴は嫌な奴なんぢやないかしら、と云ふ先客の心遣を始めから、まるで失くさせて仕舞つた。彼は、先客は家の躾の良い、きちんとした人だなど思つたが一里二里と行くに連れて、案の如く彼の鑑定通りだつたと云ふ事が解つた、先客の話は眞實にはき〳〵つて樣な時で無くも猶腹藏の無い又た物の解つた話だつた。御負けに言辭や思想は、別に考へて言ふつて譯ぢや無いのに、教育や世馴れた事や又た博識だな、と云ふ事か窺われるので旅の男は尙々吃驚させられた。どつちかと云へば御粗末な獵服を着てるし毛皮の帽子だつて感心する程のものでも無いんだもの、まさか此の男がとは實際思いも寄らなかつたからだ。遠方の土地に住み乍ら、殊

に二十四にも成り乍ら人の噂をうかと眞に受けて居たのが多少恥かしく成つて來て、馬車が南に進めば進む程益々此の土地や土地の人に謝罪なけりや濟まない樣な氣が仕て來た。

此の男はブランデンブルクで此の土地に就いて甚麼な工合に變ちきりんに聞き込んで來たんだらう！

多くの旅人は此の山道卽ちネッカル谷を賞め讃やすが矢張此の道を通つてシュワイッへ行つた人達の目から見ればくだらないものだと云つて居る。だが、こゝの住民に就いては此の男の故郷では定評があつた。ベルリンで、此處からシュワーベン人種になるんだと、如何にも哀れむ樣な目付きで地圖を眺め、此の地へ行こう、君は一層同情に堪へないと云つた樣な目付きをして彼に話した男があつた。此處では全く社交的生活も總ての教育も振わないし、かいしき獨乙語が喋舌れ無い、ぶっきらぼうな禮儀作法をわきまへない人達が居る。で哀しい哉單に極く下流社會の人間許りに此の欠点があるんぢや無くつて相當な身分の人達でも御同樣に氣が狹くつて泥臭いと來て居て又た他國人が來ても恥を搔かない爲めに佛蘭西語で喋舌くる位い獨乙語が下手なんだ。このが、彼がシュワーベンへ持たせられて來た旅錢(矢鱈にちよい／＼旅行中馭者などに與ふる金)だつた。で小砂利道を安燒酎に醉ばらつた馭者の爲めに手間取らせられたので、愚圖付いて居る間に、ブランデンブルグの青年のロマンチックな頭腦の中で此の話がそれからそれへと進化して、遂々自分が、スコットの小說に在る、上流社會や劇場や、此の世のあらゆる快樂を想い悲しき思ひ出に滿たされてロンドンからスコットランドと其の住民を訪れに行く若樣の一人である樣な氣かして仕舞つた。

然し扨て此の地方の、一面に果物や葡萄が生り下つて居る峰谷々が顯れ、赤い屋根や純朴な苦勞知らずの人達が住んで居る村落が顯れ、又た欝蒼たるブナの森の此處彼處に、窓がぴか／＼してる古城が浮び出た時、彼の思想は俄に一變して、彼は此の土地を口を極はめて歎賞し、又同時に哀れな單調なマルク、ブランデンブルグに同情し、あの裸々たる砂原、あの瘦せ削けた樅の樹、又た此處には葡萄なんか綠の葉の間からべた一面に顏を出して居て、有り余つて居るのに、其の葡萄の僅か一房さへも見ずに死んで仕舞つた人は何千人だか知れ無い樣な土地に住む人達を氣の毒に思つた。然し、己れの國にはこんな物は無いが御方便に此の土地の人よりも、目は利いて居るし、言葉は耳觸りが良いし、教育が在るから、多少まあ之れで差引が付いて居るつて事が彼の愛國心に對するせめてもの慰めだつた。

扨て先客の話をすると、南國訛りは在つたが禮式なんかブランデンブルグ人と變りはなく、ちつとも旅の男の身分とか、出生地とか、旅行の目的だとかを尋ねたがらなかつた。擧動は物靜かだけど、然し品が良く、自分で口を開るよりも話し掛けられ勝ちだが、城なり都市なりが目に付き次第臆劫がらずに旅の男に其の歷史を話して聞かせた。

又た此の青色の獵服の男は、こんな冷靜に說明は仕たが、比較的親切に懇々と話した二つの事項が在つた。或る時、若い男がシュワーベンの上流社會に就いて奇妙な說を吐いた時に、青服先生吃驚りして青年を眺めて、他の路を通つてもとシュワーヘンへ行つた事が有つたのかって聞いた

が、無いと聞いて、

「あちこちで左樣ですが、殊に北獨乙は僕達の國の人に變手古な觀察を下してますね。嘘か眞實か、貴郎が暫時僕達の間に御逗留なされば自然と御解りに成ります、實際多少公平に此の見解が因つて生ずる所をですな、夫れを御觀察下さる事を御勸め仕度いんです。僕の國に取つちや或る不利益な見解が數百年も前から在ります　少くとも「シュワーベン馬鹿」(Schwabenstreiche.) なんてのは近頃になつて始まつた事ぢや在りませんからな。此の嘘ら事の大部分てものは、どうも獨乙の何處へ行つても在るやつですが、或る人種的嫉妬心や「町根性」(Kleinestädtere.) が主因で、事實出來た樣です。例へば、他所では僕等の方のものと極めちまつて、シュワーベンには奇妙な風習がある、と云つてますけど、僕等の方でも墺太利には、變手古な風習が在るつて云つてる樣なもんです。だが然し此の偏見が近頃に成つても、又た、文化は進歩するし社交生活が盛んに行われて居乍ら、夫れでも消えないつてのは二ッの有力なる根據が有るんです。然し根據つて南獨乙の方の罪ぢや無いんです」

「一寸暫らく！」とブランデンフルグの旅人は稍不審氣に叫んで「僕はこう云ふ風には考へない積りです、其の事つてのは……」

「世間ぢや北獨乙で見掛ける吾國の人達を見て僕達の風俗習慣を極めます。假令へ、此の人達が理性的な人達であるにしろ、其の人達には未だ二ッの欠点が有りますから貴郎方の目に惡るく寫つるんです。先づ言葉は……」

「一寸！」と青年は慇懃に受けて「皆なが皆なぢや在りません、例へば貴郎は素敵に上手に發音なさいますよ」

「僕は僕の思ひ通り發音するんです　吾國の人も大抵皆な左樣なんです、でも僕達は二重母音の發音の仕方が貴郎方とは異います。語尾は昔風にやるか又は早口に云ひますから耳觸りに、荒らっぽく、又た何方かと云へば下品に聞こへます。御國で御覽になるシュワーベン人の大多數つてものは大學を出た許りで北獨乙の造營物を見物してあるく人達とか、商用であちらへ出掛けて行く若い商人達許りなんです。こんな連中を捉かまへて全く勝手な標準を作つてそして又大變間違つて居るんです。御國ぢや男の子や若い男の禮儀作法に付いて八釜しく云ひますし、小供なり、若い男なりは莫迦に早くから交際場裡に引張り出されますが、僕達の方では殆んど八年か十年程後れて初めて出るんです」

「僕の言つた事は丁度其の事です」と青年が答へて「此の禮儀つてやつは自分獨りぼつちぢや誰にだつて覺へられないものです、だから之れは御國の教育法の欠点です……」

「禮儀つてものは實際上卓越して居るものだから、未來の國民共が先づ第一に必要欠く可からざるものとして教へ込まれ可き筈のものだつて事を前提として」

「そんな筈ぢや在りませんが。でも物の序に實際覺へられますな」

と青年が云つた。

「只單に序に覺へるとすると又た空惚するともう忘れます。然し此の事は僕達の話題外です。北

獨乙では未だ元來社交界に出てもしない人達が自分達の習慣を程よくする爲めに世間へ顏出しを初めた樣な人達を見て、僕等の習慣とか社會とかを判斷するのは誤りだと主張します。夫れとも亦貴郎方は、未だほんの學生上りの應對も立居振舞も祿すつぽに出來ないてあいを二三人御覽になつて、それを目安にして此の國の人達を判斷なさらうってのですか？」

「無論左樣ぢやありませんよ。ですけどシュワーベンでは上流社會でさへも奧さんや御孃さん方に奇妙な風習が在る想ですね」。

「いや、其の御話は僕の國の人達が北獨乙の貴婦人に關して聞いて居るのと大差はありませんよ。故國の娘共は北獨乙の貴婦人と云へば何時でも何か高尙な本を手にして居ると想像してるんですからね。で僕の國に就て起る誤解の第二の源因は、北獨乙からの旅行者と又た、僕の國の家庭の特有な狀態が基なんです。北獨乙では家庭に出入するのは困難ぢやありませんし、一人御知己があれば十人の御知己を拵らへるのはわけは無いんですが、シュワーベンでは反對です。自分達同志では圓滿に仲良くやつてます、外國人は物珍らしく思ひますか迎へると云ふよりは寧ろ避ける方です。うわべの冷淡の代り其の償を付ける或るものを屹度御發見なさいませうよ。北獨乙の人達は開放主義のことは開放主義ですけと、なか〳〵氣を許す樣な事は在りません、其處へ行くとシュワーベン人は初めはつきが惡るう御座んすけれど、一旦此の人ならばと思ひ込んだら、上つ皮許りでちやほや云ふ所謂御交際上手な社會では見る事の出來ない眞心で親密に交際します。」

と獵服の男は笑を含んで答へた。

「そんなら、僕等の偏見の第二の原因てのは、北獨乙の者が元來全くシュワーベンの上流社會に交つて交際してないと云ふ点にあると仰有るんですか？」

「無論です。若し拍子良く上流社會の內に御入りなさり、僕等と親密に御なんなされば、生活狀態や風俗に就て全然獨り極めをなさらない樣に御なんなさるし、又た學者と云われる人にも劣らない位敎育のある、善い習慣は固く守り惡習は一笑に付して仕舞へる理屈の解つた、きだての良い人を御見付けなさいませう。」

ブランデンブルグの男は微笑した、「あの男は國を愛してる、又た國を馬鹿にされたくないからだか、世間見ずだからだか兎に角一生懸命御國最負を仕てる」と心に思つた。シュワーベンを一生懸命辯護するのは無理も無い事だと思つたが、でも矢張一寸まいらせてやつた事が內心嬉しくって仕方が無かつた。彼は辯に任かせてくだらない事をべら〳〵饒舌つて、――南獨乙よりも北獨乙の方が余計そんな風が有り勝ちだと人も感する所の――シュワーベン人を話題以外の、北獨乙の方が澤山ある大特長に耳を傾けさせて仕舞つた。彼は南獨乙のも一人云ひは云つたが、北獨乙の作家や詩人をぶつぢけに二十人も述べ立て立てた。シュワベーン人は馬車が國道の曲り角を曲る時に、嚴然たるハイデベルヒ廢墟を指して、辛つと夫れで彼の滔々たる懸河の辯を喰い止めた。ブランデンブルグ人は其の廢墟を驚吃して有頂天になつて觀た。城の赤い累石は秋の夕陽に照らされて一層赫々と輝き、薄暮は荒れ果てゝ居る石垣に生茂る樹や叢に暗い物凄い綠色を帶ばしめて居る、馬車の開放なした弓形の窓からは黑い森が見へ、羅陵の樣な霧は山々を罩めて、全景に

神秘的な風致を沿へて居り、金色の夕雲と暗緑色の蒼穹はネッカルの流に影を宿して居るのが見へる。

「うむ」こんな詩趣がマルクブランデンブルグに在りませんか？」と獵服の男は人が良さそうに笑ひ乍ら尋ねた。

ブランデンブルグ人は聽こえない樣で、傍目も振らず此の絶景に見惚れて居る。彼は此處ぢや流石に詩趣つて事に就いちや爭はれないと感じたらしい。

こんな事があつた後又た獵服の男の顏色はもとの沈着拂つた極く無頓着な色に歸つた。ちつとも景色の事なんかどうこう云わむ、御負けに大抵の事は控へ目に話仕た。

だが、段々日が暮れて來て四圍の景色が朧ろげに成つちまつたので、二人の話が、二ッ三ッの最近の事件と政治論に移つた時は相手の顏はもう能く見分からなくてたがブランデンブルグ人は、相手の呼吸ははづんで來るし、話は膏が乘つて來たので、要するに大將が莫迦に面白がつてる話にぶつかつちやつたらしいなと推量した。二人は獨乙の形象(Gestalt)、內部の力を論じた。シュワーベン人は稍憤慨して古今の比較を始めて大に近代を罵倒した。全体から云へば此の說と自分のたてとは合わなかつたんだけど、己れの方が說か正しいんだと自惚れてるもんだから結論には贊成してやつた。そして何の氣もなく、

「僕はプロシャ人だ」

と自分の思惑を言ひ始めた所が運惡るくそれが相手の機嫌を損ねちやつた。シュワーベンの青年は辰巳上りに成つて、他所ぢやいざ知らず此處ぢや屁にも成らないのに喋舌つて喋舌つて喋舌り捲くつて、そして無理でもすりでも自說を通うさうと努め。ひとのは甚麼な立派な說でも耳にも入れないで自分で觀察したの許り獨り良がりに良がつて居た。噂と、コペニック人(コペニックと云ふ町の住民を云ふ)の男の言辭を聞いて慄へちやつた。車体の內に居合せた馭者に此の話を聞かれやしなかつたかしら、旅客は如何だつたらう、なんかつて心配し、又たスパンダウ、コペニック、ユーリッヒを始めとして思ひ出せる丈けの監獄のある町なんかも想像した。そこで隣のたいしようを沈默させるには車体の隅に倚れて眠つてる風を仕てるのが一番良いて、だと思つた。北獨乙の人には此の名が無政府黨と云ふ如く響くなり)と云ふ恐ろしい名前でこんな人達が居るつて事を知つてたプロシャ人は此

(二)

此の恐つかない夜も過ぎて、二人が目を醒ました時、ヒルボン市の塔が霧の中から浮び出て間近に見へた。

「此處で私の旅行も御仕舞です」と靑上衣の男は町の方を指して云つて、「御蔭樣で」とブランデブルグの靑年を親しげに眺め乍ら「面白く旅を爲まして馬車を降りるのが殘り惜しう御座んす。もう一日も御伴が出來たら嘸ぞ面白いんでせうけど、」

と言葉を添け加へた。

「十四日前からの因緣なんですけど、今御別れするつてのは僕もよく〳〵星の廻り合せが惡るい男なんですね。……部室が狹いと御懇意になるもんですな、一体人間て奴は大都會に居ると隣

り合せの部室に居ても永が年一と言も口を利かずに居ますけどね。御交際する樣な秋が來ると自然と御ちかしくなるもんですね。僕の隣りの席はまるで戰地の樣に人が入れ變りましたけど、永らく貴郎が居て下すつたのは仕合せでした。面白可笑しく貴郎の御祖國へ連れて來て頂きましたから」。

とブランデンブルグ人が答へた。

「ヴュルテンベルヒに比較的長く御滯在ですか？」

「母のゆかりのものを訪ねるのです。長がう御座んすか短ぢかう御座んすか、其の連中と都（ウ市）が氣に入り次第です」。

「再た御目に掛かれますか如何うですかなー。いつスツットガルトへ行かれます事やらそれさへ解り兼ねます。僕が御話し申した吾國の人の性格を然し決して御忘れなすつちやいけませんよ。一寸あれ等の氣風や風習に調和する事が御出來になれば、何所へいらしつても受けますし、貴婦人連には、外國人としてですけど非常にもてますよ。又た男……さあ、始終貴郎が御交際なさる社會のことですが……決して明亮りと、ぎくっと胸に耐たへる樣に……」

と皮肉とも付かず、親切とも付かない笑らい方を仕乍ら云ひかけて言葉を途切らせて居ると、外國人は待ち遠しがつて、

「そこで？」

「貴郎は獨乙人だと仰有らずに、己れはプロシヤ人だと仰有つちやいけません」

外國人の返事は馬丁の喇叭の響と車ががたつく音に消されて仕舞つた。

旅客連は此の町に休む事になつた。外國人は最う一度例の男を馬車から朝飯を奢りに連れて行かうと思つた。

だが最う其の時には郵便局の戸の下で、年寄つた馬丁が山程の手紙を渡して居た。彼は顏を赤め乍ら忙しく一通封を切つた。

外國人は通りすがりに氣を付けると本の筆だつた。一寸拍子が拔けて旅宿で窓際に歩み寄つて、例の男が用事あり氣に下男と話をして居、すると直ぐ立派な馬が二匹牽き出されたのを見た。途端に例のシュワーベン人が廣間へ急ぎ足で入つて來て、きよろ〳〵仕乍ら見付け出して、傍へやつて來は來たが、素早く眞心から別れを告げて行つちやつたもんだから、兼ねて聞かうと思つて旅行日程の中に二本もアンダーラインを引いといた事は勿論、ハイデブロンのケーチェンの住居や家族の事さへ聞けず、大に不平だつたが、あんなにせか〳〵別れを告げて行つて失敬な奴だと思つた心も彼が立派な逞ましい馬にひらりと飛び乘つて悠然と廣場を飛ばせて行く姿を見たら解けて仕舞つた。あの男の樣に立派な体格も表情に富んだ顏も共に備はつてる人は極く稀だなと眞から思つた。

「あの青い上衣を着てる人は誰だ？」

と彼は他の窓際で馬上の人を見送つてる馬丁に尋ねた。

「御名前は、俺つちやー、存じやせんのでへィ。只だ存じて居りやす事は、人が男爵樣、男爵樣

つて申しやす事と、ほいから、此處から暫らく參りやすとネッカル河の畔で御座んすが、其處に御親父さんが地面を御持ちん成つて居りやす事と、あの御宅は豪氣な丸持ちだつて噂と丈けでヘイ。あの御方は極くたまーに此の町へ御いでん成りやすんつす」

之れつ切りぢや物足り無いが彼は再び車内へ入つて腰を下した。彼の父は以前此の土地へ來た事が在るんで、シュワーベンの華族は風變りだ風變りだつて聞かされてたんで、人付きの良い、目端の利くあの「道連れ」が其のシュワーベンの華族だなんて夢にも思へなかつた。一服してる内に新らたに隣へ來た男は自分はバイエルンのホップ商人だと身の上を打ち明けた、それを聞いたらさっき迄で居た人と比較して大變損を仕た樣な氣がして仕方がないし、ホップ栽培の話なんかくだらなかつたから、別れて行つた青年の性格を追懷したり、又た、今行く親類を、こうぢや無いか、こうだと良いな、なんかって前にも考へた事を又た一通り御復習をやつた。叔父さんは面白いことは有るまいと極めちまい、六十位のよぼ〳〵爺に相違ないだらうと想像した。彼の父も二十五年も前から、佛頂面な、いたり猫な、頑固爺だと認めて居た。こんな性質は年取つては直らないのが常だ、で一層益々從兄妹のアンナさんに望を屬した、長が年シュワーベンに住居つてた友達がアンナは此のシュワーベンの花だと云つてた。氣に入つた面白い五六週間が屹度在り想に思へた。又た、好いたらしいと思わせるのに役に立つ手段をあれかこれかと熱心に數へた、熱心も熱心だつたが、若し印象を與へやうとすれば屹度出來る、と云ふ自惚れ方も素晴らしかつた。そして、唯だ最う深くも考へずに、シュワーベンの御嬢さんをぽーッとさせるのは御茶の子だと考へちまつて容色良しの從兄妹のアンナは多分最う賣約濟になつてるかも知れないなんて事は、てんで、思ひ付きも仕なかつた。

彼は都に着いて直に、以前に叔父が住居つてた家へ案内させた。

されど鳴る神の如き聲音もて、
汝れに開かれぬ。
汝が求むるものは……

ずつと以前から田舍の所有地に引込んでて、今度の冬にも歸つて來ないだらう。此の家でさへ最うあの人達の持物ぢや無い。

ブランデンブルグ生れの旅人は卽座に心を極めて、懷かしい町を見物する爲めに此の日を利用した。そこで、もと來た道を引き返へして叔父さんの別莊のあるネッカル谷へと急いで行つた。

此のチャーミングな土地に近づくに從つて、數週間田舍で暮すんだつて事が益々嬉しくなつて來た。田舍だと、都會の娯樂や、又た都會ぢや何よりも大切なものにして居るが、田舍ぢや余計なこつた、七面倒臭いもんだと思つてる、あの禮式と掛け離れちやつて、ぢきに知り合ひになつたり親密になるつて事も、交際の狹い土地ぢや直に近しくなるものだつて事も僅かの經驗からだが知つた。

叔父の地所から一時間程の里程の所で、本道から横へ枝路が岐れて居る。雇つて來た御者は森へ續いてる道を指して、道はぐるり此の山を一廻りしてるが、それより此の道を歩いた方がずっと

短時間でチーヤベルと城へ登つて行けると云つた。青年は馬車を降りた。今迄は馬車で山の背を來たんだ。今、一面に樹か茂つてる中位の高台を目の前に見て、此の高台から谷の景色をずっと見下ろさなきやならないと決心した。御叔父さんの城はチッカル谷の中だと聞いてたから。馬車を先へ遣らせて人道を登り、鬱蒼したブナの森へ入り込んだ。彼は今日迄で此んな威風堂々たる樹を見た事は無かつた。木の間を洩れてあちこちに樫と、トチリコが見へる。山櫻のとてつも無い大きな奴が在るのには度膽を抜かれた。次第〳〵に登るのが苦しく成つて來た。山は俄に嶮わしく成つて、伯林仕立のハイカラ服が反つて不便で嫌になつて來た。遂々頂上に着きは着いたが未だちっとも景色は見えなかつた。木立は道を下るに從つて益々茂く成り、小徑は尙細くなり、それが又た半分より狹くなつてあつちへも、こつちへも岐れてる所へ來て、案内知らぬ森に迷い込ませた御者と自分の間抜けを罵つた。が遂々右の方の徑を行つて、凡そ二三百歩も行つた時木の葉隱れに綺麗な着物がちら〳〵見へたので、彼はほつとした。

彼は歩調を早やめて行つた所が、古るい樫の樹陰でベンチに腰掛けてる若い女の前にひよっくり出ちやつたんで少なからず面喰つた。其の女は落葉を踏んで行くがさ〳〵〳〵云ふ音を聞き付けて、持つてた本から靜かにずーっと眸を擧げた、だが其の女も、若かい、然かもきりっとした裝をした男をこんな寂しい場所で目の前に見たんだもんだから、矢張り面喰らつたらしかつた。颯と顏を赤かめたが別に伏目にもならず出し抜けの訪れを、どうしたってんだらう、てな風に見詰めて居た。青年は何んて言つて良いか一寸言葉が思ひ出せなかつたので御辭儀を先へ二三度やつた。

此の瞬間に心に浮んだのは「間が良いと此の容色良しの娘がアンナぢやないか？」と云ふ言葉丈けだつだ、それが精々だつた。吃度左樣だと思つた時始めて近寄つた。其の時御孃さんは書物を閉ぢてベンチを離れた。

「若し御邪魔に成りましたら御免下さいまし、あたくしは、どうも道を間違がへたらしいので御座いますが。これでチーヤベルと樣の御城へ參られませうか」

と彼は云つた。

「若し此の近邊を御承知遊ばしていらっしやいませんのでしたら、此の歩道は御都合が御惡るう御座いますわ」

と良く透る聲で答へた。そして、

「貴郎は丘の上で、左へ御行き遊ばさなかつたからで御座いますわ、其の道で御座いますと城の方へ參つて居ります」

と云つて小腰を屈めた。青年は來た道を引返した、が二足三足行きは行つたが如何うも心殘りがして堪らなくつて又引返へした。彼が引返すのを見た時容色良しの娘は又たベンチから立ち上つた。だが今度は當惑して顏を眞赤にした、そして見張つた目付きで、ほんとに當惑してるのが讀めた。旅人は不躾に思われても關まうことは無いと思つて、自分が話仕てるのは若しやチーヤベルヒの御孃さんぢや無いかと訪ねた。

「然うで御座いますが……」

と不審氣に答へた。

〝Eh bien, ma che're Cousine.〟(それぢや從兄弟さんで！) と旅人はにつこり仕乍ら云つて、同時にしな良く小腰を屈め乍ら「では、私くし、貴嬢の從姉弟のラントーウを御紹介せが出來て滿足で御座います」。

「え？從兄妹のアルベルトさん？」と御嬢さんは嬉し想に叫んだ「では、遂々本當に御約束通りで御座いまして？まあ、父は甚麽なにか喜ぶ事で御座いませう！御伯父様や御慕しい御伯母様はいかゞ？そして貴郎の御旅は？」

と艶でやかな唇から順ぎから順ぎへと質問の矢を浴びせられたが、ラントーウは容色の良い從兄妹を有つて居るのが嬉れしくって、ぼーッと仕ちまつて、順に返事が仕様つても一言も胸に浮かばなかつた。

甚麽に其の話し振りが、氣をそゝる様に、飾りけ無く、響いたらう！

ラントーウは、從妹の「言葉使い」は間違つてるとは如何しても思へないが、でも然し何所と無しに言葉の節々や、調子が故郷で聞くのとは全く變つて聞へた。彼は、余り急いで旅行しちやつたもんだから、段々に言葉を對照して見る準備が出來る間が無かつたんだらうと感じた。

「妾くし、散歩が何より好きで御座いますの」とアンナはラントーウに寄り沿つて靜かに歩るき乍ら言つた。「谿の徑はもつと、づーッと面白う御座んすのよ。ネッカル河は美事に蜿蜒つて居りますし、古るい御城は高台を飾つて居りますし、妾くし共の城もまあ幾分か其の飾りの役を致して居ります、少くとも古蹟と申します点に關しましては……。村や、又た町も谷のあちこちに御座います、とは申しますもの、然し城へ登つて參ります歸り路は、隨分嶮わしう御座いますし、骨が折れますし、又た人通りもかなり御座いますの、此處の森は城より高かう御座いませんし、半時間もこちらへ登つて參りませは閉め切つたBoudoir(極親密な人などを通す婦人の應接室)に居ります様に閑靜なんで御座んすよ」。

「では遂々プロイセン生れの從兄弟が、偶然り迷い込んで、靜寂を破つた譯なんで御座いますね」

と、ラントーウは詞を挿んだ。

「大体から申しますと城の内は一概に八釜しいとも申されません〝Tausend und eine Nacht〟(千一夜と云ふ小説)に御座いますあの魔法を掛けられた城の様に靜かで御座います。召使共と、裏手の棟に居りまして決して出て參りません執事の外には住む人と申しますと、父と妾くし丈けで御座んすの。ほんとに城の内は寂んと致して居りますので、時々恐わくなつたり悲なしくなつたり致して參りまして、更つて森の靜寂へ逃げ込みます事が度々なので御座います位ですの、でも森の方が未だ木の葉の音もざわ〳〵致しますし、鳥の聲も致しますので良ろしいんで御座います」――(未完)――

――筍　譯――

雜嚢の塵芥

國友生

一　雨漏りの記

文月七日は、新暦の、七夕なれど、生憎や、降り出したる、霖雨の、夜の淋しさ、限なし、まして吾家は、犀川の、左岸にありて、人稀に、紅塵漲る、金澤の、市街を離れて、田舍近、遠山近水、恣、庭を流るゝ、用水に、時節なればや、昇り來る、眞鯉緋鯉の、背揃へ、金魚浮沈の、愛らしさ、黄ばみし枇杷は、客人の、口を滿して、餘あり、杏和蘭莓茱萸、北國美人の、口の如、此處塵寰の、汚なし。

父は去年の、暮の年、霰交りの、寒き夜、紫雲の布團に、打臥して、西國淨土は、永き旅、先づ第一の、吾兄は、今年四月の、櫻時、黄金の鯱に、名の古りし、中都の役所に、御轉任、妻子と共に、住居ひけり、今二の兄と、顧ば、難波の葦の、埋れて、昔の名殘、更になき、商業の中心、富の本、富の日本を、背に負うて、起ちし大阪、北の區に、勤務の人と、なりにけり、夫婦住み行く、三兄は、父の商賣、引繼ぎて、夜の錦と、飾るべき、玉屋鍵屋と、同手合ひ、別家の人と、なりにけり、二なき雪舟の、門の砂にも、數ふれば、數へられ得る、四の兄は、湯氣の消ゆとも、名は消えぬ、今山中の、人となり、漆器圖案に、筆研く、年は二八の、吾が妹は、良緣ありて、この彌生、櫻に耻ぢぬ武士の妻、夫は日露の、戰役に、天晴盡して、胸間に、名譽をてらす、金鵄章、賜はる人ぞ、幸も幸、

さればよ留守に、居殘るは、誰と訪ひ來る、人あらば、老母と我の、二人限り、若しも憂の、なかりせば、靜かな夏の、夕には、河原に涼む、事も得む、若しも樂しき、金持の、隱居の如く、あらむには、京本願に、參詣して、極樂淨土は、蓮の上、笙篳篥に、晝寢かな、何はともあれ、二つには、二千餘年の、花洛陽、春は朝の、嵐山、夏は四條の、夕涼み、京見物と、シャレもせむ、されども今は、如何にせむ、襤褸を纏へる、身の苦勞さ、外出を耻ぢて、獨り座し、孤燈の影に、破れ衣、縫ひ合せつゝ、一寸止み、止みては歎く、不幸の身よ、落つる涙を、見せじとて、平氣を裝ひ、後向き、拭はる心、お痛はし、

今に晴れざる、梅雨は、頻りに漏りて、蚊帳のうち、いとしき母の、額打つ、哀といふも、愚なり、人の樂しき、短夜も、不眠苦思の、歎息に、長く明かして、今日八日、渦卷き返へす、濁流に、怖るゝ岸の、人の顏、竿に熊手を、結び付け、流木拾ふ、賤夫婦、それらの樣を、見し時は、簾格子に、寄り添ひて、父と語らひ、出水見し、事も涙の、思出や、折しも妹が、摘み來たる、堤防の莓に、興添へて、喰ひつ笑ひつ、物語り、優しき妹が、心ばえ、嚴かなりし、父親も、顏に湛へし、笑の波　それら追想聯想も、涙の種と思ひなば、母の心は、如何ならむ

今日此頃の、世の人は、中元の贈答に、忙しく、右往左往に、急ぎ足、躓く拍子に、品物は、ヌット飛び出す、橋の爪、目の下尺餘の、睨み鯛、蒸菓子箱は、桐なれや、金澤片町、石川屋、こ

れはレッテル、夏模様、父上在世の、時なりし、干鰤砂糖の、贈物、手に下げ使ひし、事ありと、語りて落す、一雫、無言の幕は、下されて、梅雨の闇の、長思ひ、見えざる空に、父々と、呼ぶか啼くのか、時鳥、泣くか慕うか、時鳥、（古日記の一節）

二　斷頭臺

紅花爛漫たる一華麗の美都の夜指に數萬圓のダイヤは光り蜂腰に幾千圓の輕絹をつけ其聲や天女の樂を奏するが如く其姿や優艶、月下の巴里…イルミネーション、新綠の蔭に優しき媚の光を投げし時怪しき兩性の影法師、その喃々の聲は何、嗚呼奢れりな、巴里の人、空に月光を蔽ふ叢雲あるを知らざるか、地に落花の風あるを……あゝ夫れ悟らずや、快樂の夢に憧憬れし其刹那革命の大鐵槌は振りおとされて悲絶慘絶の叫び聲、來し方行末顧よ、榮枯盛衰果てしなき果敢なき巴里の春の夢、一夜嵐に散る櫻、豈に人生無情の理や、

すは々々吹けり、吹き捲けり大革命の烈風が、蜀の錦衣は早破れ吳の羅布は空に舞ひ ダイヤは投げられ髮の毛亂れ、斷頭臺は其處此處に、昨日の花の樹の蔭に今朝腥さき血の櫻散る、富士の額に月の眉、朱の唇に夜櫻狩を愛でし昨夜の喃語も夫に別れて何かある、靑ざめし目と髑髏に猶靑月慘く映す、此處巴里の花の園、路頭に迷へる可憐の兒乳を求めど親は無し、生きたる女神と祠られし人生の幸福や一貧女、活版業者の美妖の婦、花の巴里の劇場に勤めし昨夜も今日の幸福、モルモロ夫人の眉の月、

三　貴人の夢、貧者の現

冬枯の森、雪の月、
瑤臺春は櫻香に、
短檠淡く夜も深く、
紅閨の中悲哀あり、

紺藍の河、風寒し、
薫ずる御園嵐吹く、
羅絹の肌うそさむし、
破鏡の嘆に咽ぶ聲、

玉香滿つる殿堂裡、
金髮搖れて玉音は、
春庭不斷の戀と戀、
妹背の山の紅葉狩り、
醉步の足は輕げなり、

寬帶の裾、輕く曳く、
漏れ來る紅唇ピアノの譜、
連理の枝下に喃語あり、
秋月空に微笑めば、
比翼の錦床夢ながし、

終日勞苦に、身を碎き、
パンに憧憬る勞働者、
苛酷の斧は擧げられて、
十字街頭馬車追へる、

黃昏戻る街角は、
留守居の妻と子は泣けり、
重稅人の首絞る、
無心を乞ふ憔悴し手、

叱咤と鞭打にしほ〳〵と、　退歩て凭る電柱かな、

王者の夢は長くして、　貧者の現哀れなり、
ローアル河は紅染めて、　河邊に波の打上げし、
曉方の死体には、　啞々たる烏の集ひ來て、
嘴む瞳孔ゆ暗紅の、　血潮は流れて慘し、
日々に數增す屍は、　貧しき妻か貴婦人か、

四　夏季雜吟

灯取虫　灯取虫鬱憤の夜を顏角に
水模樣の透かし手紙や灯取虫

木下闇　大流の河原調査や木下闇
一斧入らぬ太古の堂や木下闇

瓜　土蠻屈せば瓜酒宴を棕梠の葉に
登山隊過ぐる小村や瓜盡きて
上流に瓜村續くや皮堰に
負けば强ゆる瓜合せも此村奇習

清水　隣國へ古道を越すや岩清水
鱗光る清水淋しく殘る村

蝸牛　逆臣の門の腐木や蝸牛
剝落の朱門飾具とや蝸牛
染盟の色溶げ水や蝸牛

雲の峯　一峯崩れ二峯東西や雲の峯
畫樓去れば湖に湧き返へす雲の峯
長城の望樓崩れて雲の峯
雨を知る駱駝の聲や雲の峯
背景に棕梠點々や雲の峯
兵燹に名刹燒けて柿の花

柿の花　柿の花原料紙漬け桶の腐れ水
拾ひ殘す矢あるを柿の花埋めて

晝寐　寄せ太鼓晝寐の猫の惑ひ逃げ
天井低き瓦ほとりに晝寐起

汗　暴風雨雲や手汗辷りに櫓の落ちて
山路續く荷馬鞍下や汗熱れ

汗拭ふ色手拭や山車曳く兒

河骨　河骨や金腐水の縞光り

河骨や清濁落合ふ口碑沼

參秋　婚遲速麥刈る歌の上手下手

汗乾けば荷馬背白し麥埃

薫衣香　掛香や御道筋の車風

夕立　夕立や白蝶黄蝶の番ひ避け

夕立晴れ錦鳥飛ぶや虹欄に

日傘　繪日傘や舟遊を火熱放つ時

繪日傘や禿踊りの初舞臺

足拍子手拍子打つて日傘かな

コバルトの壺

山本白聲

白き石枯れたる草の中に見る落日の空輝ける頃
雲流る夕暮町の黄なる灯と我を追ひつゝ冬の雨來る
病めるとき後の森にふと見たる青き灯思ふ草に目の入る
虫けらと我と隔つる似たるもの野を歩みつゝ寂しく思ふ
コバルトの壺傾けて落つる日に夕の心書かんとはする
解せぬ言臺詞に聞ける合歌に又見し我日今日も過ぎ行く
吾が哀愁心靜にともしびの後の暗き空間を見る
ともすれば幼き心しみ〴〵と湧くや子等と獨樂廻はすなど
いつはりと知りつゝ語る我心終りしあとにうすら淋しき
十九てふ二十に一つ足らざるがしばし安けき心地するかな
初夏の緑に吸はる吾が心一人野に立つあかるき朝
わが二十心にくきは白鳥の翅にも似て過ぎし心が
心よき夕ぐれなればいろ〳〵の明るき店を覗き廻れる
若人のうまゐも悲し夕よりシト〳〵と降る初冬の雨
譯もなしされどいつしか薄暗き夕を愛づる我となりしか
恐ろしき我が先きの日の秘事を手繰る心驚く心
かつてなきもの足らぬ日の午後の風戸による我をそゝのかし吹く

栗色の雲に見出づる哀れさはほのかにも似る我が胸の影
飛び〳〵に胸の冷たき石を踏む其度毎の大なる音

溫泉にて　（以下十首）

川沿の灯も囁くか薄白きもやに見出づる我が幻よ
公園のベンチにもたれ筆をとる人も來れば耻しき我れ
心よき朝湯の道を我れ知らず停留場の群にさまよふ
照り曇り庭に爭ふ日にも似て我がこのごろの心みだるゝ
やゝしばし話して歸る木鋏の下に音する初夏の朝
幾度か細き針もて皮膚をさしこの平凡に裏切らんとする

白日と月光と

鳴澤

月ぞ流るゝ犬のむくろの痛ましき洪水の夜の强き思ひ出。
其上に身投げありしてふ山奥の橋に更けたる有明の月。
はてしなく洪水の夜の月光は濁水ひたしひろごりてゆく。

あくまでも生きん死なじと滅びゆく骸抱きて故郷に伏す。
五月雨るゝや栖榴の花は悲みにたへずとばかり庭にこぼるゝ。
あはたゞしく夏を迎ふる弟に悲しや姉のおとづれもなし。
歸れども人はおはさず共に泣く人はおはさず涙ぐまるゝ。
夜の水魂のはなれし人のごと夏草の野を音もなく逝く。
蜻蛉の薄き羽を透く初夏の光の中に思ふことあり。
熟れし實の酸味よろこびし少年の思ひ出浮ぶ雨そぼふる日。
白き花震ひて咲けり月光はふす黄色せる悲しみを投ぐ。
鳥啼かばわが此愁ひ消えゆかん小鳥よ來啼け日光の中。
日光よ別れて一人物思ふうら若き兒の瞳の色に似よ。
もの陰の小暗き土にどくだみの花いたましく夕暗にさく。

四高俳句會句鈔

風に霧と散る噴水や芝若き　繞石
追へば右に左に羊草若き　同
暖かき雨に苗本を假植うる　同
下女が荷の蒲黄風呂敷暖かに　繞石
伊吹茨頒つ隣三日灸据うる　同
藥箱に探す艾や二日灸　同
二日灸妹に參宮ねだらるゝ　同

二日灸　點師が慈眼子の眤ひ　繞石
畑物の出來見に裸　風呂終へて　同
獨木舟の人裸　河岸椰子茂る　同
煙草火に知る裸　夜道馬連る　同
梯子高く棕梠皮むく裸男が　同
裸ならぬもの　酋長木蔭部落會　同
水馬敎練　裸許すも川中洲　同
岩あるに夜を休む　渡舟夏柳　同
鐵棒は日南木馬は葉柳に　同
晝休む　架橋演習　夏柳　同
枇杷島の一日攝待　夏柳　同
若草の布干場栂の城名殘り　乙贊堂
若草の艇庫ほとり友まてる人　同
四季亭や若草餅に詩趣榮ゆ　同
若草の嵯峨の夕や牛馬　同
若草や鐘うれしくも蟻集の徒　同
若草の廣場に工事石置けり　雲外

若草の庭照るに天井塗り換ふ日　雲外
若草に旗などや牧の縱覽日　同
若草や牧の山羊皆乳張り時　同
暖かに紅顏や小膽の君　同
二日灸ある由說敎休み寺　同
冷し瓜の加減見に立つ裸かな　同
打つけに裸や役所もどり來て　同
黃旗搖れを期して伏射に若草に　幽水
杖占に若草の岐路大を捨つ　同
軍鷄は鷺群りの羽搏ち若草に　同
窟見の人に貸草履若草に　同
甞て湖庭の此地へ家並若草に　同
伽籃修理を鑿打つ檜材若草に　同
水竿突けば泡浮いて暖き沼　同
干湖殘りを暖に水母乾く磯　同
二日灸に遇ひしを疎遠謝し會ふ　同
二日灸玄關に吊し駕も見て　同

葉柳や曉を尙消へぬ瓦斯　幽水
葉柳に瓦斯管埋めを土堀れる　同
若草や秀才遺稿を讀む所　絃子
蚊帳名所染場紅布と暖かに　同
暖かや薪の一打に肌脫ぎて　同
暖や紅傘五影湖渡舟　同
日干せ夜具身ほてり更に夜暖か　同
二日灸五里の在處の歸步輕う　同
氣球小さう若草に御見學のあり　喜見城
遠忌寺の塔に若草野展望を　同
溫泉にあきて廢鑛を訪へり暖に　同
小舟あやつり湖に泥をあぐ暖に　同
田を畑換への計もあり寺領暖に　同
灸師碁に訪へば多忙なる二日灸　同
燈臺守舟人の二日灸もして　同
裸子の網繕ふ浦邊豐漁なる　同
裸連れ練り行くや馬寄せのあり　同

網ひくを身習へり船に裸子が　喜見城
寄進木運ぶ人阪を裸にて　同
葉柳や水豐かある村の驛　同
御獵地の撰定も船場夏柳　同
田へ移すに養魚とる日風葉柳に　同
ハーン會起す議も舊居夏柳　同
首途祝ぐを花草に馬も曳き添へ　愛松
鞠を蹴る沓の滑りや若草に　同
陸を踏めば癒ゆ船暈も若草に　同
尾長鷄の尾も光る草若き風　同
圓き山を水繞る草若き鄕　同
家と馬と替ふ約談や若草に　同
畫筆凝れば眩むも草に若き宿　同
繪馬上げの出藍の美擧や草若き　同
髮結ふも庭にてす草若き風　同
二番樹皮剝ぐに猶汁す暖や　同
島に渡る田舍芝居や暖き　同

病み秘めし鶴暖く起ちにけり　愛松
墾田も移民雄圖に暖かき　同
仁王像に紙礫打つ妓や暖き　同
二日灸果樹園に雨けぶる午　同
酒氣を斷ちし悔耳鳴りに二日灸　同
庭作りしを裸のまゝに酒坐欠ける　同
網場殘り拾ひ漁りも素裸に　同
豊漁祝ぐ裸踊りも洲光りに　同
丘は碑の遠白に若草の人　自聲
若草の土掘れ加減馬市と見る　同
湖舟の客暖に談湯女も出で　同
遲打てる時計暖か温泉町なる　同
裸山地辺りも見て湖舟の談　同
裸山雨意いつも瀬鳴りの音に知る　同
登山口林廣場の裸群れ　同
湯頭碁も裸果樹園すかし見ゆ　同
漁場寂れ裸群れ遠う傳ふ磯　同
段丘の葉柳に眺望見違へる　自聲
挿木をはこの葉柳に先師邨　同
葉柳に指顧す城拜觀日　同
脚氣得て若草に露を踏む修行　山雨樓
若草や千代女の出し村の風　同
二の二手大事云ふ碁や暖き　同
南像に蒲團干す家暖かき　同
杏實に彫る羅漢像暖かき　同
法宴に待す弟子の身暖かき　同
扇腹にいつか寢入りし裸かな　同
聖母圖の裸吹きぬく風薫る　同
奥飛驛に葉柳餅の雅事ありし　同
龍師住む内裏間近かや夏柳　同
亡國の大寺依々たり夏柳　同
葉柳の茂る湖避暑印象に　同
傾きし言問ひ塚や草若き　拜山
着き草燒野に入れば黄なる哉　同

若草の野邊に暮れ行く草の笛　拜山
若草に荒れ入る一騎影遠し　同
居留地に若草を見る日となりぬ　同
若草のもゆる礎石や多賀の柵　桃甫
若草や誇りげに行く雄鶏ある　紅花
暖かや開帳參り笠の列　同
二日灸一顰一笑東の間に　同
花山近か里の撤橋も草青む頃　畝水
若草や婚儀避けゆく不縁石　同
鯨脂煮る巨釜らし錆びて青む草　同
若草や實生をめくかみなつかき　同
疫祓ふ仁王潜れり草青む日　同
暖や雲雀敎ふわれ眞仰向　同
暖かに甲羅ならび干す寺子かな　同
暖や小兒背に守る裸馬のある　同
寂れ移りの驛の名殘や夏柳　同

時言

去るときに

A生

It is man's priviledge to doubt.

此は確にテニスンの詩句であつたと思ふ。人はどうしても考へるものである。また考へなければならないものだと思ふ。校風とは一体何であるか、如何なる意義を有して居るのであるか。我々は先づ考へて見なければならない。

理屈を言へばいくらでもある。然し我々は理屈の前に先づ感情の咀に聽いて見たい。アーテルリンクの戯曲の中に「心靈の相會するとき毫も唇を動かすことなくして總ては知られる」と言つた人物があつた。理智に訴へたり思索を運んだりするのは要するに相對的な知である。人生や自然は決して推論理義の法によつて通達されるほどに單純なものではない。フアウストは彼れ程の博識であつたけれども要するにそは文字と言葉の知識であつた、人生の深味がそんなもので解き得る筈がないのである。物質的客觀的自然的であつた文藝の傾向もだん〳〵と主觀的になつて來たではないか。アーサー、サイモンズは言つた。物質の考察と調整とに世界は長く靈的方面を飢えさせて居たのが今や其の靈が復活して來たので新文學が起つた。曾ては文壇の努力が一に現實の暴露であつたのが今では情緒主觀のロマンスを見出さんとする熱情となつて居る。我々の「直感」、夫れをおいて絶對眞理は遂に悟り得ないものではあるまいか。

人生の靈的意義を悟らんとする新しき努力に答へ得る者はインテユイションより外にはない。

想界の新生命は理論にあらずして感觸である、現實にあらずして超自然である。肉より入つた靈である、官能より進んだ感情である。我々には皆尊き潜在自我と云ふものがある。我々は物を直感することに依つて之を呼び起し得ることと信ずる。直感、私は我が四高を如何に直感するのであるか。

廣坂通から見える一個の煉瓦造、四高は果して夫れであらうか。至誠堂に掲げられた「至誠」の二字、校風は單に夫れだけであらうか。今の法律は學校を見ることが餘りに單純淺薄であるけれども、然し學校の本質は決してそんな輕佻なものではあるまいと思ふ。私は學校は何處までも一個の人格者であると思ふ。校友の靈肉を纏めて立つて居る一個のヂャイアントである、永劫の生命に生きて行く靈的意義を有して居る者であると思ふ。人は或はロマンチックだと言つて笑ふかも知れん、然し私には此の否定し得ない直感が實に大切な絶對知だ、潜在意識の發現であると思つて獨りで尊がつて居るのである。

今更法人實在説を擔ぎ出すまでもなく團体に根本意志の存在を否定することは出來ない。固より其の意志は個人を度外した者ではない、否個人の意志がなくては全然團体意志は存立し得ないものであるに相違ない。然し乍ら個々の意志が集つて成立した團体意志は既に各個の意志とは全然別物であると云ふことを知らなければならない。國民は相集つて國家を形成するが國家は最早一國民ではない。國家其の者の意志は決して國民各自の意志と同一物ではないのである。八百校友、之をおいて四高は成立すべきものでない。校友の意志を離れて學校の意志が存在すべき筈もない、然し斯して成立したる學校

意志は遂に各個の意志其の者と同一であると云ふ事が出來ないことは明である。同樣に學校の人格――校風――と云ふ者も校友各自の人格を基礎として成立するのであるけれども、斯くして成立しかる學校の校風は最早各個人の人格其の者であると云ふことは出來ない。此處に於て我々は一國の國民として、一團体の團員として、一校の生徒として三重の意志を有しなければならないことゝなる。團体意志を表示する者として、また各個の意志を主張するものとして我々は時に二重生活に陷ることがあらう。團体意志を主張する反面に自我の肯定を要求する慾望がある。一見甚しく矛盾したことの樣に見えるけれども其處に人生の眞然なる點があると思ふ。所謂大我と小我の名稱はこんな處に當てはまるものではあるまいか。そして實際小我を進めて大我に合せしめようとする努力、其處に個人の向上發展があるのではあるまいか。一見矛盾した樣な二重生活は極めて調和的な者でなければならないのである。マーテルリンクも飽まで自我の發展に基礎を置く其同生活を主張して居る。校友各自の自己意識先づ此が成立の第一前提ではある。斯して成立し終りたる校風は其處に獨立の權威を持たなければならないものであらう。少くとも八百校友を統一する位の力はなくてはならない。校風發揚の叫、豈にそは空虛なる怒號であらうか。叫は要するに團体意志の叫である。意志主張の努方である。校風とは大勢の趣く所に名づくる假の名稱に過ぎないと言つた人があつた。そは校友に自己意識の必要なることを強く見た爲め遂に他の一面を見忘れた謬見であらうと思ふ。自己意識の大切なるは固より言ふ迄もない、が夫れと同時に團体意志の獨立を忘れてはならない。で要するに校風問題は我々が自己意識と團体意識との調和統一によつて解決さるゝものだらうと思ふ。校風の叫豈に徒爾なるものであらうか。冷かに皮肉な目つきをしてじろ〳〵と眺めて居る樣な人。私はそんな人を見る毎にモ少し考へて貰いたいものだと何時も何時も思つた。誰でも少し考へたら自己と團体との存在位には通じ得るだらう。

筆は何時しか矢釜しい議論に滑つたが議論は兎角妙味に乏しい。私はもう少し熱情的幻想を追つて行きたいと思ふ。「善の研究」にもこんな事が書いてあつた。

純粹經驗に於ては未だ知情意の分離なく、唯一の活動である樣に、又未だ主觀客觀の對立もない。主觀客觀の對立は我々の思惟の要求より出でくるので、直接經驗の事實ではない。直接經驗の上に於ては唯獨立自全の一事實あるのみである、見る主觀もなければ見らるべき客觀もない。恰も我々が美妙なる音樂に心を奪はれ、物我相忘れ、天地唯嘲嘵たる一樂聲のみなるが如く、此刹那所謂眞實在が現前して居る。之を空氣の振動であるとか、自分が之を聽いて居るといふ考は、我々が此の實在の眞景を離れて反省し思惟するに由つて起つてくるので、此時我々は已に眞實在を離れて居るのである。

學校には最も濃厚な熱血が絶えず循環して居なくてはならない。校友と校友との間、先輩と後輩との間には一切の水臭さ味を去つてしまはなければならない。論議よりも先づ感激である、知よりも先づ愛である。私は此の感激と愛とを以て四高を知りたいのである。四高彼や人格者として儼存するに至つてから彼の靈は城の松と共に常磐である。我々は其の靈感に觸れなければならない、そして其處に suggesse の力を得な

ければならない。イエーツが言つた disembodied powers whose footslepe over our hearts we call emotions' 其の disembodied powers を認識しなければならない。我々は此の熱愛に依つて自己の潜在意識を闡明すると共に、學校々風は發揮せらるゝのであらう。此は決して私の理想を開陳したに止まるものではない、三年間の四高生活に於て確に經驗したる校友間に於ける生活の一部であつた。曾て或る先輩の手紙に、

……我等は若い者である、若いが故に心の人となり度い念は非常に燃えて居る。此の心を永久に抱擁して世を渡り度いものである、即ち精神及趣味の人となつて日を送りたい。

こんな心で結ばれた深い交、此が四高の核心を今日まで作つて居るのであると私は深く信ずる。總ての汚穢から洗い清められた殆んど神秘に近い「信」、其の中に心行くばかりに沒頭し得た者は何と幸ではあるまいか。そこには神秘を見、詩美を見、美しいロマンスを見ると共に、清く尊い人生の眞髓を味ふことが出來るのだもの。金城生活に美を憬れて來た私は寧ろ豫想以上の美に觸れることが出來た、——固より同時に豫想以外の醜をも見たけれど——そして血の湧く生活を繰り返へす機會を得た。私は今去るに臨んでつくづく運命の高き心に感謝せざるを得ない。

要するに愛は知の極點である。いくら理論に於て達しても感情に通じないものには「力」がない。そして此の「力」、夫れに依つて團体意志は常に悲壯なる高調を保たるゝのであらう。明確なる自己意識を通じて得られたる理と直感が齎らした情と、返す〳〵も切望して止まない。

（六月八日）

雜報

叙任辭令

四月十一日
陞叙高等官五等　教授　大谷正信

四月三十日
體操副科劔道師範ヲ囑託ス　堀正平

六月七日
陞叙高等官三等　教授　西英盛
陞叙高等官六等　教授　横山良盛
教授　山本鬼一

北辰會委員改選

來學年北辰會各部委員左の如し

一部三年丙組　巣山了徹
一部二年乙組　渡部生一

講演部
一部二年丁組　永井四郎
一部一年乙組　新山與次
一部一年丁組　金本萬吉
二部二年甲組　石端良平

語學部
和文
一部一年丙組　山本與吉
一部一年丙組　岡田龍淨
一部二年丙組　蓮澤淨淳
一部二年丙組　石溪曉昇

漢文
一部二年甲組　早上愛次
一部二年丙組　鳴澤寡愆
一部一年甲組　坂野千里
二部二年乙組　北條敬太郎

英語
一部二年丁組　諸井慶五郎
二部二年甲組　松倉時之助
三部二年　松井捨八郎

獨語
三部一年　松井勝冬
一部一年甲組　松井孝

音樂部
二部二年乙組　北條敬太郎
三部二年　中村勸
三部一年　北村譽造

雜誌部
一部二年甲組　井田虎男
一部二年丙組　鳴澤寡愆
一部二年丁組　吉岡關太
一部一年甲組　井口長三
一部一年甲組　佐藤友一郎
一部一年丙組　樅山眞
二部二年甲組　水野昌雄

弓術部
一部二年乙組　土肥忠雄
一部二年乙組　小野英夫
一部二年丁組　諸井慶五郎
二部一年甲組　篠原益夫

劍道部
一部一年丁組　福島藤次郎
一部一年丁組　高橋良策

二部二年乙組　小坂嘉一郎
三部二年　高田昇

柔道部
一部二年甲組　川上實男
一部二年丙組　森長四郎
二部二年甲組　近藤可哉
三部一年　兒玉勇

野球部
一部二年乙組　渡部生一
一部二年乙組　神尾毅一
一部一年甲組　塚田清男
三部二年　神田垂穗

庭球部
一部二年乙組　泉孝太郎
一部二年丁組　高松宗直
一部一年丁組　川上大造
三部一年　金子正夫

遠足部
一部二年丙組　松田義郎
一部一年乙組　中平政雄
二部二年甲組　酒井右馬二郎

漕艇部
二年二年甲組　俣野景秀
一部二年甲組　石澤儀兵衛
一部一年丙組　白井季吉
二部二年乙組　林昌夫
三部一年甲組　阿波加政信
三部二年　瀧川仁太郎
三部一年　合滿義郎

先輩通信

扨て何を申し上げてよろしきかはわかり不申候へどもかくも思ひ付きたることに製造化學と云ふ科にて學ぶべき學科等に就て少々申し上ぐべく候

製造化學と云ふのは一体どんなことをするのであるかと云ふ質問は絶えず出會ひ其の返答にても閉口致し居り候殊に斯樣な問を出す人には六ケしきことも云はれず何がよき誰にでも了解し得る定義でもなきかと考へ居り候然し斯く尋ぬる人は全く門外漢に多くあることに候へども同じ二部の人にても製造化學の化學と云ふことをのみ見て高等學校時代の化學實驗を考へて實驗としさへ云へば終日試驗管を振りて赤くなつたとか青くなつたとか云ふて居るものとのみ考へて居る人もある樣に存じ候とは雖も然らば試驗管を振盪して黃くなつたとか白くなつたとかと云ふことは絶對になきかと云ふに試驗管は實に化學の記號ども云ふべきものにして必要なるものに候へども絶えず試驗管にのみたよることは御座なく後にて申し上ぐべくも實驗に於て試驗管と親しむは只短期間のみにて候試驗管の化學者とは極く初歩のものを云ふ代名詞だとは小生の方の教授の云はれたることにて候

其れはさて置き學科のことを申し上ぐべく候學科のことゝは雖も大略大學一覽に又は理工科大

學規程にあるものに少々説明を附したるものにて御賢察を乞ふものにて候此の規程は昨年改正せられたるものにて小生等が入學し學び來たりしものとは多少異なり居れども大したる變化はなければ別に誤まりもなからむと存じ候時間などのことは其の受持の先生により多少變更せられる場合も有之べくと存じ候又目下留學中の先生もあれど講義の順序も毎年同一とは參らず候以前一年にてなしたるものが今は二年で又以前三年で講義を聞きたるものを今は一年又は二年でするも云ふことも有之候而して之れ等の課目は各自別々のものなる故に數學など〻異なり是非とも是れを學ばざれは彼れは了解出來すと云ふことなきものにて候へば差支へも御座なく候故に左に一學年にてなすものも來年には三年にてなす樣になるかは知られ不申候故其のつもりにて御覽下され度又此の改正になりてよりはまだ一學年にもならざれば二年三年ではどれをなすのかはわかり申さず候へども之れは大抵小生の推察を以てなし置き候時間數は一週間の時間數學科の順序は規程にある順をとり申し候

今學科のことを申し上ぐる前に製造化學の學生が教を受くる先生方のことに就て一言申し上ぐべく候此の科の學生は比較的諸科の講義を聞くもの故如何なる先生の講義を聞くかを知り置く必要も有之べくと存候

製造化學科の先生は

理學博士　吉田教授
工學博士　吉川教授
工學博士　大築教授
（留學中）理學士　松本助教授
工學士　難波助教授
工學士　福島講師
工學士　蜂屋講師
農學士　奥村講師

純正化學の先生にして製造化學の學生が講義を聞くもの

理學博士　久原教授
理學博士　大幸教授
理學博士　近重教授
（留學中）理學博士　松井助教授
理學士　小松助教授

採鑛冶金科の先生中

工學博士　齋藤教授
理學士　比企助教授

機械科の

工學士　濱部助教授

電氣科の

工學士　清水助教授

土木科の

工學博士　日比教授

斯くの如き多くの先生より講義を聞くこと故從つて學科數も多く候次に學科のことに就て少しく述ぶべく候學科は三ヶ年にて終るものにて候

物理化學（大幸教授）一ヶ年　三時間

製造、純正、物理の三科の合併にて候一學年にてなすべき者にて中々六ケしき課目にて純正は勿論製造化學にも必要なるものにて工業的に直接間接に應用せらるべきものにて殊に或るものを研究すべきときは欠くべからざるものにて候

無機化學（近重教授）一ヶ年　三時間

純正化學と合併にて候二學年にてなし居り候

有機化學總論（來學期よりは誰れなるや知らず昨年は松井助教授一昨年は久原教授にて候）
有機化學各論（小松助教授）一ヶ年　四時間

純正化學と合併にて九月より十二月までに總論を終り一月より六月まで各論にて候

此の無機有機の二つは純正化學と同じ講義を聞

くこと故工科のものには少しく負擔が大にすぐる樣思はるれども三年の終りに於ていざ論文を草せんとするとき大に役立ち申し候有機化學は高等學校にても覺え難きものを大体を詳しくすること故殊に困難にて候講義は一學年にて終るものにて候故に一學年生は之れと物理化學とにて隨分骨の折るゝことにて候

應用電氣化學(吉川教授)　一ヶ年　二時間

此の講義は電氣科と合併電氣化學は最近のものにて我國にても未だ此れを研究し居らるゝもの少なし吉川教授は此の方の所謂 authority にて其の講義は殊に注意すべきものと存じ候其の應用の点などは今更ら申し上ぐるまでもなけれども我國の如きは未だ多く用ひ居られざるも早晩各地の水力電氣等も追々完成せらるゝ曉には實に有望なるものと存じ候高熱を利用する電氣爐の應用窒素肥料精銅等一々擧ぐる必要もなく候然し此學科は比較的宜しき學問にて候へば clear なる頭腦の人が研究せしならば實に面白かるべきことならむと存じ候

應用電氣化學特論　(吉川教授)一ヶ年一時間

之れは化學の學生のみ講義を聞くものにして前の講義を一層專門的にしたるもの

寫眞化學及其應用(大築教授)　一年六ヶ月　一時間

此の課目は新に入りたるものにして其の講義は一學年より始むるものと存じ候大築教授は寫眞化學を熱心に研究され居られ候こと故定めし有益なることゝ存じ候

無機酸類及人造肥料
アルカリ工業　(吉川教授)一ヶ年二時間

人造肥料の講義は昨年より增加せられたるもの無機酸は硫酸硝酸の製造にてアルカリ工業と共に古來二大工業と稱せられしものにて候然しアルカリ工業も電氣化學進歩と共に此の舊來の製法は歷史的のものとなるならむと存じ候

燃料及び築竈法(大築教授)四ヶ月　二時間

石灰及セメント(大築教授)一ヶ年　一時間

共に一學年にて修むるもの之れは別に說明するまでもなきものに候然し築竈と化學とてなすのかと云ふ人もあれば一言申し上ぐべく候燃料と云へは固体燃料即ち木材、石灰、コークス等種種あり液体のものとしては石油、重油、其の他の油又は液狀のものにて燃料たるもの瓦斯体のものとしては石炭瓦斯 generator gas, water gas 等種種あれば其れに相當して築竈せざるべからず故に之れに適したる竈を築くことも亦製造化の學方の仕事にて候

ガラス及エナメル
陶磁器及煉瓦　(大築教授)一ヶ年二時間

之れは二學年にてなす之れまた字の如きものを製造することなれば別に說明も要せざることと存じ候然しエナメルにては研究の余地充分に有之べくと存じ候此のエナメルに就ても其の鐵器と上にかける琺瑯質との間の研究などにも物理化學などの知識を必要とし居り候

脂肪、油及其の應用(蜂屋講師)　六ヶ月　一時間

脂肪、油は即ち動物質の脂肪及油は植物油にして之れ等の採取精製及び其の應用に就ての研究にて魚油の精製などに就ては大に有望にて候

製紙工業(蜂屋講師)　六ヶ月　一時間

前者と共に二學年にて修むるもの

顏料及塗料(吉田教授)　四ヶ月　一時間

之れも一學年にてなすもの吉田教授の講義は主として實地を目的として講義せらるゝものにて候顏料とは即ち各種の顏料にて繪の具等のことにて候

皮革及膠工業(吉田教授)　四ヶ月　一時間

一學年にて講義のあるものにて皮革工業は我國にては穢多の仕事として古來賤しみ居るものなれども工業として實に大なるものにて候とは雖も其の習慣上誰も製革場の技師になりたいと云ふものなく候其の工場を見て汚なきのと惡嗅あるのとにて我々は閉口致し申し候

礦油工業(吉田教授)　六ヶ月　二時間

一學年にてなすもの礦油工業にて字の如くにて候即ち石油機械等の精製法等にて候

纖維論
染色及捺染　(吉田教授)　一ヶ年　三時間

二學年の講義なり纖維論は即ち纖維にして毛、絹糸、木綿、麻等に就ての研究にて染色及捺染の方は以上の纖維の漂白仕上より染色捺染法に及ぶものにて候

色素化學及染料(吉田教授)　四ヶ月　三時間

三學年の九月より十二月に至る間の講義に候先生は染料界に於ける authority にて候染料などゝ云へば或は大工業と考ふる人少なき樣に候へども決して然らず例へば染料中の一つなる人造藍の如きは年々日本に輸入せらるゝものは大なるものにして年々五百萬圓以上にも上り候其の他の人造染料も亦余程輸入せられ居り候而して人造染料の事業は未だ日本には起り居らざるも近時各地方に瓦斯工業の盛に起れるに從ひ其の染料の原料たる「コールター」も多く產出するに至りたること故此の工業も早晩始まることゝ存じ候

木材乾餾及其の製品　四ヶ月　二時間

瓦斯及其副產物

從來なれば松本助教授の講義なれども留學中なる故に蜂屋講師代講せらる松本助教授は來年には歸朝せらるゝならむと存じ候小生などは松本助教授の講義を聞きたれども目下は蜂屋講師なり聞く處によれば同講師の講義は簡單に過ぎる傾きあり候然し多分來學年よりは再び同助教授の一層新しき詳しき講義をきゝ得ることゝならむと存じ候木材乾餾の製品としては現今各地方を騷し居る「メチールアルコール」此の一つの液体製品にて候瓦斯は御承知の如き「コールガス」にて其の副產物として實に數多ありて瓦斯中の不純物としての「シヤン」より K C N「アンモニア」より「アンモニア」及び肥料の一つたる硫亞肥料を製し得「コールター」より各種の藥品「アロマチック」化合物の大部分は得られ「ベンゼン」「石炭酸」「ナフタリン」「アンスラシン」の工業藥品及び之れより前にも述べたる染料の中間物の數多を得られ最も興味あるものにて候然し之れ等の「コールター」より前の如きものを精製し居るところは目下東京、大阪の二瓦斯會社にとまり居り候

澱粉及砂糖(蜂屋講師代)

之れも松本助教授の受持にて候之れは別に說明も要すまじくと存じ候

醱酵論及釀造法

之れ等二つは一ヶ年毎週二時間の講義にて候此の講義も松本助教授の留學中奥村講師の代講せられ居るものにして此の奥村講師は東京の釀造試驗場の技師に候へば此の講義には最も適したる方と思はれ候同講師は毎年二月頃より四月の間に來られ五週間程の講義あり候而して此の間に全部を終ることゝして其の爲め實驗の時間も他の先生の時間も多少割きて其講義に宛てるのにて候又此の短日月中にて菌培養の實驗も有之中中多忙にて候

工業藥品製造法　(難波助教授)一ヶ年一時間

之れは名稱の如く工業上に用ふる藥品の製造一

一例を擧ぐるにも及ばずと存じ候二學年の講義ならむと思はれ候

以上は製造化學科の專門の學科にて候次に擧ぐるものは主として他科の學生と合併講義にて候

機械工學大要(濱部助教授)　一ヶ年　三時間

採鑛冶金、土木科の一年と合併講義にて候之れのみが製造化學に於ける機械工學卽ち水力學熱力學「エンヂン」等の講義にして其他各專門の方の機械道具の說明は其れ夫れ其の科に就て聞けども一般の力學的のことは之れのみにて何となく心もとなく候

電氣工學大要(淸水助教授)　一ヶ年　二時間

之れも採鑛土木の各二學年と合併講義にて候殊に六ケしき電氣工學講義を此の少數なる時間にて學ぶなる故何が何やら大抵はわからずに過ぎる樣なものにて候之れ等はもう少しく詳しく時間も增加して欲しきと考へ居り候

工場建築法(日比教授)　六ヶ月　二時間

時間の都合上か製造化學にては二學年電氣、採鑛、機械の三學年と合併講義にて候工場建築の大要として數學的の仕事に遠さかり居り、材料强弱學などゝ云ふものも知らざる吾等には種々なる公式などが出て來るときは一寸閉口致し候

試金術(齋藤教授)　四ヶ月　講義一時間
同　實驗三時間

三學年の初めになすものにて採鑛の二年と合併にて候採鑛の方は一ヶ年にて候へども我々の方はDryssayのみなれば四ヶ月にて終りにて候

鑛物學(比企助教授)　四ヶ月　講義三時間
一ヶ年　實驗二時間

三學年にてなす採鑛の一學年と合併講義にて候實驗のみは別々になり居り候鑛物學は高等學校時代のものと同樣なることをなせども唯少しく詳細に亙り居り候始めより各論にて候實驗と云ふは鑑定にて候高等學校時代今は知らざるも我我の時代は余り鑑定と云ふことをせざりし故始めの間は少々面喰ひ申し候殊に採鑛學の方に行かるゝ諸氏は高等學校より少々鑑定にてもなし居られなば余程よからむと存じ候

製造冶金學(齋藤教授)　六ヶ月　三時間

採鑛、機械の三學年と合併にて候冶金の一般のことにて候

以上は皆講義のあるものにて候之れより大部分の時間を費し居る實驗のことに就て少しく御話し致すべく候

化學分析實驗　一學年　十八時間

化學分析實驗の名の下にすべきものは定性重量容量及び二三の燃燒管を用ひてなす有機の分析にて候九月より十二月までは所謂試驗管を振つて居る定性分析にて候一際實驗にては講義なき故に各自檢べつゝなすものにて候參考書として最も適し居るは「ニウス」氏著のものにて之れさへあらば當室にてなす分析は大抵有之候Sampleは多くは固体のものにて候間々液体とせしものもあれども之れ等も蒸發して固体として試驗する方が早く出來る樣にて候高等學校時代と異なり充分なる時間のあることなればGroupごとに分けて實驗をして充分確めることを得る故に誤まることは極く少なく候而して一つ終れば其れに就て自分のなしたることを記したるBeportを出すにて候故にらしいだけではすまし得ず候一月より三月頃までは重量分析卽ちGravinutuxにて候之れを始むるとしても如何樣にするものなりなどゝ講義はなき故本を檢べてなすにて候若し高等學校にて其の方法の形だけにても見て置けは大に助かるべくと存じ候此の期間は試驗管はもはや余り役立たず天秤と親しむときにて候此の時中學以來諳記せし分子量などゝ云ふこ

とを實地に用ひ來るのにて候此の分析は時間を要し鋭敏なる天秤を取扱ふなる故に少しにても粗暴になせば幾度やり直しても異なる結果を生ずれば極く丁寧にせざるべからざる故に面白からざるものにて候

次で四月五月頃は容量分析卽ち Volumetux analysis にして標準液を滴落して其の化合物中には何が幾分あるかを見るのにて「ビユレット」「リーターフラスコ」と親しむ時にて候重量分析よりも幾分早く結果も得られ數回繰り返してなしても大なる差を生せざれば此の分析の方が多く用ひられ候然し其の化合物により此の方法も用ひられざる者あり又此の方が精密度を減ずるものは重量分析によらざるべからざる故に何が必要と云ふこともなく候五月頃より各交代に燃燒の試驗卽ち有機物の分析をなすのにて候之れは今井先生が有機化學の講義の始めに於て示されしものと同じものにて燃燒管に分析すべきものを挿入して燃燒爐にて熱して其の出で來る水素なり窒素なり炭酸瓦斯なりの量を見て組織を定むるものにて候先づ一學年にてなす實驗は之れにて終りにて候

一寸一言附け加へ申すべく候採鑛冶金科の化學實驗も同樣なれども右のことを二ヶ年にてなし居り候從つて數は多少多き樣にて候殊に定性と重量分析とは澤山やり居り候然し時間數は少なき故從て多くなすことは御座なく候

工業分析實驗　四ヶ月　十九時間

二學年になりて先づなす實驗にて候前の分析に比すれば此れは實際世上にある品物の鑑定の如きものなれば仕事も面白く何となく之れで始めて工科らしいと思ふ樣になり候然し之れも講義も何もなく其の問題と參考書との名を擧げあるのみに候へば其の參考書を檢べて其の中の最もよきと思ふ方法によりて試驗するなり從つて中中多忙なる時期に候大抵一つのものにつき參考書が三つ四つもあれば其れ等を一通り見て其の中よきと思ふ方法によるなり故に原書も比較的多く眼を通すことを覺え申し候其の分析に供すべきものゝ例を擧ぐれば水之れは水を分析すれば酸素と水素とよりなると云ふ樣なことにては御座なくよく溫泉等にある分析表にあると同樣なるものにて候私等がかつて分析表を見て十萬分の一だとか百萬分の一などゝ實際に知られるものかとも思ひし時代もありしが實際なして見てなる程などゝ感心せしことも有之候其の例酒「ビール」「ワイン」、澱粉質、砂糖、粘土（之は一年のときになしたる定性又は重量と多少異なり居るもの）石炭之れ等は「カロリー」卽ち發熱量等も測り居り候又石鹼、人造藍、機械油之れは分析と云ふよりも比重、粘度、引火点等の如きものを見るのにて候其他瓦斯植物油等實に多くあれば余程上手にせざれば半分も出來ずにすむことも有之候ともかくも興味あれば誰も一つでも多くなさんと勉强致し居り候

之れが終れば愈製造化學實驗にて候一年より同じ室にて實驗をし居たりし同級生は此に於て三分又は四分せられるのにて候故に講義の時間の他全級の者悉く會すると云ふ機會なく候

製造化學實驗　六ヶ月　十八時間

新規定によれば此の實驗は四部に分かれ居り候以前は三部にて候之れは寫眞化學が入りたる爲め之れが一部分となりたるならむと存じ候今全級を四分して其の一組が一つの實驗中は他は各他の室にて實驗することゝ相成り居るのにて候四部とは電氣化學、寫眞化學、無機製造化學、有機製造化學にて候假に此の順にA組がなすとして其の仕事の大体を申し上べく候

電氣化學室は吉川教授の指導の下に實驗をなすものにて實驗は何處も同じく講義はなけれども應用電氣化學の講義中にあるもの主としてなす樣にて候然し詳しき事は矢張り原書を見ざればわからず候先づ此處にては「クロームメーター」の使用及び試驗を始めとして電氣分析電解によりての酸化作用還元作用を應用せる幾多の製品電氣を熱にして電氣爐を用ひて「カーバイト」「カーボランダム」等の製造等が主なる者にて候之れ等がすめば大築教授の下に寫眞化學及び無機製造化學の實驗にて候此處にては「セメント」の試驗陶器の釉藥諸種のガラス色ガラス之れ等は小規模なれども工場にある爐と同樣なる爐にてなすなり然し小規模なると學校なれば晝夜を通じて熱するを要するものなどはとても出來ざれば斯くの如きものは半製品にてとゞめ居り候處法に從ひて調合したる寶石模造品の如きも全然似よりたる色も出ざる事も有之候

次に有機製造化學の實驗を行ふとすれば此處は吉田教授の室にて候此處にては先づ各種の顏料（大抵十五六種）の製造を始め絹糸、毛糸、木綿の染色法及び木綿の漂白法又若し時間あらば石鹼の製造もなすにて候

之れにて二學年全部の實驗は終るのにて候

三學年になれば各自研究せんとする方面に進むものにして電氣化學を研究せんとするものは吉川教授の下に寫眞又は無機を考究せんとするは大築教授の下に赴くと云ふ如くに相成るのにて候而して九月より十二月までは其れ夫れ其の方に於ける特別實驗をなすにて之れは毎年同一と云ふことはなく其の人ごとに異なり居りて互に他の人は何をして居るかを知らざる程にて候私は目下吉田教授の下に有機化學の方に居れば此處に於ける特別實驗に就て一寸申し上ぐべく候此處にては毎年殆んど一定し居る樣にて候先づ「コールタール」染料製造が特別實驗となり居る樣にて候即ちコールタールの蒸餾染料中間の製造より染料の製造に至るものにて候彼の惡臭ある黑きたならしき「コールタール」より蒸餾によりて種々なるものを分別し之れに硫酸硝酸等の如きものを働かして中間物を製して見異がえる樣な美しき染料を得るときは愉快なるものにて候

一月よりは各自論文にかゝりて居り候論文の題は各自が定めることもあり別に之れと云ふて面白き考もなきときは其の教授と相談してなすこともあり候

三學年間になすべき學科及び實驗に就ては大体右の如くにて候一々に就て詳しく申し上げたきこともあれどもあまり遲延仕るべき故先づ之れにて失禮仕るべく候之れ等以外會の如きものに就ても申し上げたきも左樣なるものは後日に御話致す機會もあらむと存じ候へは今日は之れにて筆擱き申すべく候取り急ぎ思ひつきしまゝを記したるまで故余り亂雜となりたれども此の度はこれにて御免を願上候幾分にても御參考ともならば幸甚の至りと存じ候早々拜具

五月一日　　不破橋三

部報

講演部報

第三回公開演說會

五月十五日。晩春の温い日光が若々しい青葉を照らして人の心をそゝり立てる、市内は總選擧で埃が高く上つて居る、縣會議事堂の階上からはそんな物は少しも見えない　薫の高い春風にカーテンの裾が微な搖動を續けて居た、三年生は卒業にも近くなつた、三年間の金城生活も日一日と終焉に近づく、最後の叫、それを聞かんとて集り來つた聽衆は彼の廣い堂に隙間もなく詰つて仕舞つた。

一、開會の辭　　河合教授

若い若い血潮に滾る胸の底には遣る瀨ない憂悶と悲愁の影が潜んで居る、我等の眼には小さながらも現代と云者が映じて居る、我等の叫は決して空虛なる怒號ではない。三年間の默して悶えた新しき生命の源から出る獅子吼だらうと確く信ずるのである。先生は靜に壇上に立つて極めて慇懃に極めて淳朴に我等の志ある所を聽衆に向つて闡明して下さつた。かくて辰門意氣の虹霓は密爾として動き始むるのであつた。

二、無の色　　上田武次君

無味な時代、乾燥な時代、頽唐せる時代、墮落せる時代、此の中に見出し得る唯一の光は親心である、君は之を無の色と名けるのである、色んな罪惡、雜多な魔性、其は悉く此の色に依つて溶け消されて仕舞はなければ止まない。我我は何時何時迄も此の色彩の中に溶け込んで居たい。そして此の人生を清く美しく過したい者である。と云ふのが君が此の論の概要であつた。極めて眞摯な所論として床しく聞かれた、たゞ其の内容に今少しと思はる所が處々あつたけれども。

三、國富と殖民　　早上愛次君

生活難問題に論を起して滿韓殖民策に及ぶ、一場の政論、人口增加に伴ふ貧富の懸隔は國際地位の向上と共に貧民の激增と國民的統一力の減損を來す、之を救ふ唯一の計としては進取的國民を提げて海外殖民を講ずる事である、そして其の殖民地は之を遠きに求むるの愚なりと云事が君の滿韓集中策を力說する所以であつた、態度も聲も其のスラリとした論旨と共に快く傾聽せしめた。

四、我が宗教　　今村眞彦君

懷疑と煩悶とは常に新しき道を開拓する出發点である、總てが矛盾に見え撞着と映じた堪え難き苦惱は軈て君をして君を知らしめたのである、君の宗教は自己の尊重である、全我の發展である、人格の尊崇である、そして此の自己主張の窮極は我國古來の祖先崇拜と武士道精神とに融合一致する者なることを君は見出したのである、覺めたる自己を見出した時吾人は始めて眞生涯の第一歩に登る者なりと極論する時君の顏には誇りかな微笑が漂つて居た。

五、人情の反應力　　林德一君

冷靜な理性の反面には暖い人情の薫がある。此は精神の二側面であつて何れをも無視すべき者ではない、理想と嗜慾とが自己の全体で有り存在である。人情の機微を察したビーコンスフイルドは技倆秀れたるグラッドストンに對立して居た、ビスマークは之を他黨に迄應用して彼の理想を遂げたのである、我々は偉大な力が其處に伏在して居ることを知らねばならない。着實な態度、温健な說。（A生）

六、吾人の態度　　小坂義雄君

抱負とはこれあるがために五兄が生活し得る唯一のものである、抱負は宜しく大なる可しである、抱負はまた正義の後衞なかる可からず。多情多感な吾人をして瑣事に拘泥せしむ、實に大國民の恐れて恐る可きものなり、我國人に動もすればこの欠損を見る、恨多きことなり、須く大抱負を持つて海外に活動す可しと說く、君が堂々たる風丰、沈靜なる音調は內容と共に聽衆に多大なる印象を與へた。

七、獨　創　　中田　秀夫君

「明治以前の日本は日本の日本なりき、日淸戰爭以後漸く東洋の日本となり、今や世界の日本として聲名盛なり、この盛なる日本をして益々隆盛に赴かしむるは偏へに個人の偉さに待たざる可からず。然らば如何にして偉らくならんか、獨創するに外なけん、けだし古來の偉人傑士と云はるゝ何れも獨創の人ならざるはなかる可し、玆に於て余は獨創力を養ふ要件を左に述べん、曰はく、勇氣、曰はく堅忍、曰はく大膽、曰はく努力と思索、曰はく活動」說去說來君が辯はかろきユーモアをグルンドトーンとして、流るゝが如く、更らに幾多の例話を引用して巧みに場面の變化を作りたるなど瑣末な所に深い苦心の迹が窺はれた。

八、金澤を去るにのぞみて　　岡　弘二君

要するに置土產的の演說であつた。君が金澤に下したる觀察は保守的てあると云ふことであつた、金澤市が保守的となつた原因を分けて、

1. 前田侯の統治方針
2. 風土の影響
3. 廢藩當時の公債

とし、痛烈に而かも愛嬌たっぷりで說いた、拍手の聲も盛んに起るノ＝＝の聲も盛に起る、場內熱沸の間を制して縱橫に論議し、まゝ奇言を弄して人の顎を解かしめたなどは流石に斯壇の宿將。

九、金澤をしてスクール、タウンたらしめよ　　中納　錠松君

敎育は國家發展の基礎なり、を立發点として日獨の敎育制度を比較し、大學設立のことに及ぶや、森文相の遺圖を思ひ、將來の大學は官立に待たざる可からざるを云ふ。これ我國には米の如き富豪に乏しく到底私立大學の完美を豫想し得ざるに依る。果して然らば此度の北陸大學設置の件は決して忽諸に附し得可からざるものなりと述ぶ。所論着實、思想穩健、徒に奇をてらはず、辯また圓熟の境に達して、既に々々學生演說の域に迷はず、君東都に入つて關東壇上新に名花を見んとするか、嚮きに中村泰治氏あり、君幸に自重せよ。

十、現代の主我思想と敎育制度　　津山　玄道君

現代青年は主我思想に囚はれたり、而かも彼等は空虛と寂寥とを感ずるのみ、これ何に依るか、もと空寂なる小我に囚はれ居るが故なり。然るに今日の敎育は如何、徒らに小我建設のみを目的として悟然たるが如し、これ憂ふ可きの事象たらずとせんや、夫れ吾人は小我を打破し大我に一致して始めて、國家と國民との一致なり人と萬物との一致なる。我國將來の敎育はこの根本を閑却す可らずと說き、最後に頃日金澤に開かれたる敎育大會の醜態を難ず、吾人また私かに快乎を叫んだ。見よ、君が痛刻なる鐵槌は容捨なく彼等が頭上に霹靂となつて落ちた、實に彼等老醜類の迷夢を覺醒するのは純潔無汚なる青年の血をぬつた鐵槌でなければならぬのである。君の直言は終に三竹生徒監をしてその

椅子を離れしめた位であつた

十一、昨年の英佛獨の關係　大谷敎授

先生は長らく英都倫敦に止つて親しく此問題を研究し給ひしなり、今度乞ふてその一端を、特に我部を通して一般市民の胸底に印象し得たのは我部にとりて永く記憶に存す可き光榮である。今や世界列强の互に入つた我國の民たるものは宜しくその目を世界の舞臺につけなければならぬ、先生が特に此問題を選ばれたのには、金澤市民も感謝して宜かろうと思ふ。先生はまづ十九世紀末の關係より說き出して昨年に於ける三國關係を詳細に述べられた。

十二、十九世紀文明の特徵　浦井敎授

先生の演壇に立たれたのは既に四方は夕靄に包まれ始めた、然し聽衆は誰あつて歸ろうとはしなかつた、先生は明快なる辯を以て、十九世紀文明の特徵が科學のプリンチップを人事に應用した点にあるを實例に就て詳說せられた、聽衆は非常な興味を以て聞えて居つた。詳細は本欄を見られよ。

以上、外に幽冥界(石端良平君)憧憬の生活(井上功君)時代思潮(堀朋近君)眞と善と美と(新木榮吉君)がある筈であつたが時間の都合で出來なかつたのは遺憾至極であつた。

十三、閉會の辭　八波敎授

我國現代の言論界の隆盛より我校講演部の現狀に說き及び、併て本會の盛況は偏に市民諸君の後援に依ると、厚く感謝の意をいたされた。

その時はもう七時になつた、町の電燈は淡い夕景に美しく浮んでいた、僕等は千人以上の聽衆が色々な印象を抱いて議事堂の門をぞろ〳〵と出て行くのを窓に倚つて飽かず眺めて居た。

そして演者諸君の健康と、聽衆の健在とを祈つてやまなかつた。(O.I.生)

木村博士講話要旨

嘗て木村項の發見者として世界學術界に於て多大の貢獻をなしたる理學博士木村榮氏は、昨年七月五日帝國學士院より其功勞を表彰す可く恩賜の名譽賞牌を授けられたるを記念す可く今回來澤昨十二日我校至誠堂に於て一場の講話を試みられたり。その大要を左にかゝぐ。

由來地球は南北を兩極としたる地軸を中心として大体に於て一定の運動卽ち自轉をなし、更に同時に太陽の周圍を廻轉、卽ち公轉しつつあり、然るに太陽系はまた非常なる速力を以てある方向に進行しつゝあるなり、その執れる道は二百有餘年觀測し來れる結果にて畧ぼ直線に近きものならんとの說に一致せり。扨てまた輓近十年間に於てあらゆる方面より研究の結果殆ど一定不動と思惟し來れる地軸も、極めて微少なる恰かも獨樂の心棒の如き一種の運をなし、その結果緯度にも變動を及ぼす事實を發見するに至れり。その後比較的觀測に便ある所に六ヶ所の觀測所を設け之を萬國の共同事業とし、觀測結果を一八九八年獨乙に於て開かれたる萬國測地學協會に於て發表せるに、我國のものは他に比して甚だしき相違を見たり、當時原因を他に歸して種々使用の精密をまし、機械の試驗をなしたれど相違は依然として相違たり。玆に於てか余は緯度の變化はたゞに地軸の變動にのみ依るに非ざるを認め終にZ項卽ち木村項なるものを發見するに至りたるなり。云々

野球部報

北辰會野球大會記事

久しく冬眠の有樣にあつた所の我部も天候の定

まり時候の暖たまるに連れ活動を初め、クラスマッチ等も隨分盛となつて來た。此時に當り五月二十三日より二十六日迄四日、野球大會を擧行した。中學時代に熱心に練習した者もあり、又全く初心だと云ふ者もあつたが、各試合とも面白く終つた、中には各人の力量がわからない爲に隨分差の出來たのもあつたが概していゝ取組みであつた。

◎第一日　二十三日

第一回戰　審判官　山根氏

	林	野	滿	村	原	野	口	井	破	得點	四	三振	三
	平	合	布	田	牧	谷	松	不	本壘打一(谷口)	四球	六		
P	C	1B	2B	3B	SS	LF	RF	CF					
留	岡	口	野	村	友	淵	下	玉	得點一五	三振	三		
久	長	井	天	奥	佐藤	鰐	松	兒	二壘打一(長岡)	四球	七		

個人々々の成績で云つても久留チームの方が勝つて居り、戰はぬ前から大体の想像はついて居た、其上久留の肩が非常によかつたに反し、林が肩を痛めて居たので氣の毒な位よく打たれた。林チームは少しも振はないに反し、久留チームは第一回に内野手の失策に乘じて一擧七点を得、第二回にも四球に加ふるに亂打を以てして八点を取り合計十五点となつた。其後は林チームが守備を嚴にした爲一点も得ず。遂に十五對四で久留チームの勝利とはなつた。

第二回戰　審判官　淡路氏

	藤	本	永	口	野	川	鰭	島	得點二十二プラスA	三振	二
	近	山	福	山	牧	石	川	東	高	安全打	四	四球	一一
P	C	1B	2B	3B	SS	LF	CF	RF					
原	川	杉	村	水	樫	野	宗	谷	得點	九	三振	七	
青	北	小	布	清	富	椰	佐	炭	安全打	三	四球	二	

勝負は隨分投手に關係する事多い。此試合に青原チームがこんなにひどく負けたのも投手が肩を痛めて居て充分の腕を振ふ事が出來なかつた爲である。且近藤チームに比して打擊力も劣つて居た、然し始めはそんなに差もなかつたが、第四回の混戰で十一点も取られた爲取返へしがつかなくなつたのである。

◎第二日　二十四日

第三回戰　審判　神田氏

	内	間	邊	松	谷	西	滿	田	中	得點七プラスA	三振	三
	竹	本	渡	高	大	大	合	山	田	安全打	三	四球	七
P	C	1B	2B	3B	SS	LF	CF	RF					
	北	岡	田	子	谷	山	下	佐	田	得點	五	三振	四
	富	島	金	瀧	杉	木	岩	柴		安全打	三	四球	三

兩者力量相同じく面白い勝負であつた、北チーム先づ攻めて、北遊擊をしくじらせて出で二壘を盗んだが二壘三壘間に挾殺せられる、代り攻めるや竹内遊擊を突いて出で次いで二壘を奪ひ、本間の二壘手の右を拔くヒットに生還す、本間も三個のパッスボールにより安々と生還する、第二回金子が一壘手の失に生きると杉山が投手二壘手間を過ぎる猛烈な三壘打をなしたので金子長驅ホームインする、然し杉山は後援つゞかず、こちらは田中大飛球を右翼に打つと右翼手ポロリと落したので得たりかしこしと二壘に達し次いで三壘を盗む、竹内四球を利し早速二壘を頂戴する、此時捕手つまらぬ球を逃したので田中還り、竹内三壘に至る、本間一壘にゴロを打ち竹内生還、三回兩軍とも振はぬ、第四回金子二壘手の頭上を拔いて出で、生還し未だ二点だのに、こちらはパッスボールと内野手の失策とで三点を加へ合計七点となつた、そうなれば呑氣にして居ること出來ぬ最後の奮鬪を試みた、北一死者の後に立ち又もや遊擊手の失により一壘に生きると富岡ゴロを二壘手に打つて北を二壘に送る、島田四球に出で、ダブルスチールを成功し三壘、二壘に達する、竹内盛んに野次られて又もや四球を出したので滿壘となる、此大切な時に本間どうした事かパッスボールしたの

で北躍然ホームインする、杉山のヒットに嶋田生還、牽制の爲投げたのを三壘手失し金子生還三点を加へたが二壘、三壘に走者を殘して木下二壘ゴロに倒れたので惜しい所で負けた、試合時間五十五分。

第四回戰　審判　神田氏

	野	關	島	西	屋	原	田	田	野	得點六プラスA	三振	四球	七	一
	東	豐	大	盧	萩	高	永	長		安全打	五			
P	C	1B	2B	3B	SS	LF	CF	RF						
利	田	坪	越	杉	岡	井	江	谷		得點	五	三振	七	
吉	太	大		小	松	深	藤	梅		安全打	三	四球	二	

之も非常に面白いクロスゲームであつた、評判は東野チームが強いとのことであつたが吉利チームの大奮闘によりいゝ勝負を見ることが出來た、第一回吉利チーム先攻無爲に終つたが代り攻めたる關右翼に打つた猛ゴロを取り損じたによつて二壘に達し三壘を盜む、大西二壘手を襲ひ關をホームインせしむ、二回目小杉遊撃の左を拔きヒットして一点を取る、越一壘手の失に生きあまつさへ二壘をも得、吉利のヒットに三壘に達したが本壘に突進して間一髪に刺された、こちらは萩原四球を利したが物にならず、第三回内野手の失策に加ふるに吉利のタイムリーな二壘打を以てし一擧四点を奪つた、之に奮激したる關三壘、遊撃間を快打して二壘に達し豊島のヒットに生還した、しかし三点足りぬ、今度は誰も吉利チームの勝利を疑はなかつたが勝負はわからぬもの第四回第五回東野チーム守備を堅くして抜かしめず、且大いに快打した、即二死者の後に長野が立ちツーストライクの後に遊撃手の頭上を拔いた、之が勝因をなしたのである、次く東野二壘オーバーのヒットで之をホームに送り己れは又關の痛快なる三壘打により生還し、關亦バッスボールに乘じて還り同点となつた、第五回塩屋遊撃手の失に生き二壘を冒險して成功し萩原の一壘ゴロに三壘に進む、高田の猛烈砂を嚙む如きゴロを吉利がファンブルするに及んで塩屋猪突して本壘を陷れた、茲に於て東野チームは六プラスA對五を以て勝ち得たのである、試合時間僅かに四十分。（備考、吉利チームの打撃順はポジションの順と少しく變つてある）。

◎第三日　二十五日

第五回戰　審判　渡部氏

	川	村	田	爪	上	邊	井	谷	坂	得點	八	三振	四
	中	居	和	橋	川	渡	今	瀧	小	安打	二	四球	三
P	C	1B	2B	3B	SS	LF	CF	RF					
	西	條	本	岩	坪	川	井	島	藤	得點	一一	三振	七
	中	北	山	平	大	石	白	田	加	安打	四	四球	七

中西チーム先攻す、中西、石川共に四球を利し、盜壘して三壘、二壘にあると平岩がセコンドオーバーのヒットを打つたので二者生還、平岩もバッスボールでホームインし三点を取つた、代り攻めたる中川、四球で出で、二壘を盜まんとすると捕手惡球を投げたので全速力で走つて生還した、次の居村三壘手の頭上を拔き又もや捕手の惡球で三壘に至り、和田の投手ゴロにホームインした、和田も一壘手の失で生きたが橋爪の飛球を平岩掌中に納めダブルプレーは演ぜられた、第二回居村負傷した爲太田之に代つた、中西チーム三人とも凡死したに反し、こちらは内野の失に乘じ二点を加へた、第三回四球と野手の失により四点を加へた、中川チームの此時の混亂は確かに敗因をなして居る、代り攻めたが無爲に終る、第四回中川退いて小坂プレートに現はれた、兩軍とも振はぬ、然し中西チームは一点を加へた、第五回二本のヒットで再び敵を混亂せしめて四点を加へ合計十一点となつた、そこで中川チームも最後の奮闘を試み盛に亂打したので守備破れ三点を奪ひ得た、しかし大勢の

定まる所は致しかたない、哀れ三点の差を以て敗北した。

第六回戰　審判　神尾　氏

	居室崎野卓			
3B	島御寺宇山田原			
P	SS	津山憲		
2B	山田蔡			
1B	佐	得		
LF	安	點		
CF	打	一五	三振	二
RF	C	七	失策	〇
		四	四球	三
P	川	島		
C	森	長		
1B	橋	本		
2B	竹	蓋		
3B	石	坂		
SS	丸	瀬		
LF	杉	山		
CF	岩	三田		
RF	渡	邊		
	安打	得點	一二	三振
		〇	四球	失策
			一〇〇	一九

一方は卒業生他方は在學生、送別試合である、力量も相四敵すると云ふので大なる興味を以て迎へられた、然し事實は在留軍打撃が少しも振はず、且兩軍とも失策が多くあまり面白いゲームでもなかつた、三年軍はよく猛打した、しかしよく之を防ぎ且一個のヒットなくしてあくまで強く對抗し僅かの差を以て敗れた一二年軍の大努力亦思はなければならぬ、内野手は隨分守備が堅く見事であつた。

◎第四日　二十六日

第七回戰　審判　千家　氏

	羽四田井幅川庭島月			
2B	丹	得		
1B	岩田	點		
C	福	一一	三振	
3B	櫻	プラスA	安打	
SS	矢	九	一	
CF	北	失策	四球	一
LE	饗	五		一
RF	涌			
P	秋			
LF	吉	利		
2B	堀			
SS	朝	倉		
C	淺	水		
1B	石	澤		
2B	中	山		
RF	小	此木		
CF	石	田		
P	六人	部	得點	一〇
			安打	五
				四
				三振
				失策
				四球
				六
				七
				九

兩チームとも我野球部の粹を拔いたもの、今回の大會に於て最も人の目をひいた勝負だ、六人部チームは打撃が勝るが秋月チームは守備が巧みだ、之れクロスゲームを見るに至つた所以だ、第一回吉利四球に出で二壘を盜み、堀のヒットで三壘に至る、堀直ぐに二壘を頂戴し、朝倉遊撃の右を痛快なるヒットで拔くに及んで二者生還した、丹羽代り攻め巧みに四球を取り、二壘、三壘を盜みパッスボールで還る、岩田、福田共に飛球に死んだが櫻井四球に乘じ　一壘手の失策で二壘に進む、續く矢幅左翼に飛球を打つと吉利と朝倉が相衝突して轉んだので櫻井さつさとホームインした、矢幅も捕手の投球を一壘手後方に逸するに及んで長驅本壘を陷れた、第二回兩軍とも凡死したが第三回に堀遊撃をしくじらせ、朝倉四球を利し、エラーに乘じて生還し二点を加へた、こちらも同じく遊撃を襲ひ一壘手のエラーに生きた岩田と中堅飛球を、石田取り損じた爲危ふい命を助つた櫻井とが還りやはり一点多い、第四回守備堅くて拔くこと出來ない、第五回六人部四球に出でゝ捕手の惡投球に生還する、次の吉利一壘手の失に生き堀の飛球を饗庭取り損じたにより二壘を得る、朝倉三壘へ猛ゴロを打つたのを櫻井パッシと受けて吉利をフォースアウトにしたはいゝが堀を刺す爲に二壘に投げた球が馬鹿に高かつたので堀がホームインしてしまつた、此時ボックスに立つたは強打者淺水振棍音あつて左翼の頭上を拔き、朝倉欣然として生還し、三点を加へた、然しこちらは櫻井遊撃の左を突破して出でホームインしたのみで一点負けて居る、第六回兩軍とも打撃が振はぬ、第七回、吉利四球に出たが堀の飛球を手にしたる丹羽、之を一壘に投じて折から壘を離れて居た吉利を刺し止めた、裏に於ては福田、櫻井、内野手の失策に加ふるに巧みな盜壘を以てして二点を奪ひ、再ひ一点を取り返へした、第八回に危期一髪に防き止め且己れは一点を加へたので、秋月チームの勝に定まつたかと思つたが、相手もさるもの第九回に秋月が野次られて四球を連發したに乘じ二本のヒットを爲して三点取り、今度は一点多くなつた、愈々面白くなつて來た、然し六人部チームに運が無かつたのか、九回の裏に四球を連發した上に捕手が惡球を投げる、野手がミスすると云ふ有樣で折角の

所で敗れてしまつた、投手六人部試合に馴れない故かどん〳〵壘を盗まれたのは直接の敗因と云つても大した誤はあるまいと思ふ、秋月チームの守備は立派なものであつた。

第八回　審判　山田氏

一方は我が大選手、他方は各官縣立學校の代表者より成る聯合軍、勝敗は初めから分明であつたが一寸面白いマッチだつた。

我軍		聯合軍	
SS	塚田	LF 西岡(醫)	
CF	神田	3B 堀田(醫)	
2B	廣野	RF 岡野(師)	
P	千家	CF 神谷(醫)	
RF	山中	SS 番匠(工)	
1B	吉本	P 舘中(師)	
LF	神田	C 森本(醫)	
C	淡路	1B 中田(商)	
3B	渡部	2B 桑山(二中)	
得點	七プラスA	得點	三
盜壘	一一	盜壘	一
失策	四	失策	一一

千家	三振	一三	四球	二	
舘中	三振	三	四球	〇	
神谷	三振	〇	四球	〇	

攻したが、千家に壓せられ少しも振はぬ、第六回迄に二壘に達したもの合計二人あるのみ、其二人も或は本壘に刺され或は後援つゞかず物にならぬ、こちらは我軍一壘手の失に生きた塚田つゞいて二壘に達し、三壘を盗んだが千家の直球を堀田受け止めた爲ダブルプレーを喫した、第二回投手ゴロで出た吉川野手のエラーと神田の犧牲球によりホームインし先づ一点を得る、第三回廣野二死者の後に立ち、打つたる球は見事二壘手の頭上を抜き右翼手之を逸したので二壘に至ると千家の猛ゴロ遊撃を襲ふ、番匠之を取つて三壘に投じ廣野を殺そうとしたが堀田之を失し廣野直ぐに本壘に突貫した、左翼手あはてゝ球を拾ひ投げたが左に遠く捕手取る事出來ず廣野生還、此際に千家三壘に冒險し、捕手よりの球を又もや三壘手ミスしたので千家ホームインし二点を加へた、第四、五回いゝ機會もあつたが後援つゞかず空しくなつたが第六回三本のヒットに一個の犧牲球を以て敵陣を破り一擧三点を加へ合計六点となつた、彼は全く我が投手に翻弄せられ然らざるものも堅き守備を抜く能はず、人皆スコンクを疑はなかつたが、第七回に三壘手の失に生きたる神谷、二壘を冒險しパッスボールで三壘に達した、實に危い所である、次の番匠中堅に大飛球を呈し未だ一死である、續いて現はれたは舘中である、必ずバントをするであろうと淺く守つたのが反對となり二壘手をオーバーして二壘打となり神谷躍然として生還してしまつた、之に元氣を得た森本自らは投手ゴロに死んだが舘中を三壘に送り、中田三壘線上にバントしたので舘中脱兎の如く本壘を陷れ、二点を得てやつと零敗をまぬがれた、我軍代り攻めると神谷新しくプレートに現はれ舘中、中堅に退いた、そしてよく守つたので無爲に終つたが、第八回又もや皆凡死したに反し我軍第八回に三壘手の失に出た淡路が渡部のバントで二壘に達すると快漢塚田見事遊撃の頭上を抜く二壘打をなしたので淡路雀躍して還る、渡部惜しい所で本壘線上の露と消え、廣野の大飛球を岡野掌中に納むるに至つて我軍の活動は止むだ、いよ〳〵ラストイニングとなり彼必死となつて努力したが最後の奮闘も何の得る所なく遂に七プラスA對二を以て我軍の大勝利に歸し、茲に野球大會もめでたく終局を告げた、時正に六時十分、彼も流石各校の代表者だ、よく勉めたが、これ以上の成績を得る事は不可能である。（終り）

本校對一中野球試合

（五月三十一日）

四時三十分試合開始は宣告せられた、聯合軍先彼一中は金澤の雄、今は少しく衰へたが昔は隨

分強かつたものだ、体は小さいが元氣に滿ちて居る、うまくいつたらクロスゲームにでもと云ふ勢で押寄せた、加ふるに愛校心に富んで居る所の健兒より成る應援團は旗皷堂々と乘り込んだ、我彼に報ゆるものは唯眞面目あるのみ、奇麗に戰つて立派に勝つた、戰況を簡單に左に述べる、第一回先頭第一に塚田左翼に大飛球を送つて倒れたが續づく丹羽巧みに四球を利し一壘手の惡球に二壘に達し廣野の二壘手の右方を拔くヒットに生還する、小島拾つて投げたのを一壘手逸したので廣野サッサと二壘を得る千家見事三壘手の頭上を拔き廣野三壘に達する、山根の遊擊ゴロに本壘に突貫して之を陷れ二点を得た、彼代り攻め郡山四球に出ると淡路盜壘を防ぐ爲に二壘に投げた球が高きに過ぎ郡山三壘に至る應援團大いに喜んだが、我よく之を牽制して刺し止めた、其後で小嶋がヒットを打つたので待つて居ればよかつたのにと云つた者あつたが時すでに遲い、第三回丹羽又も四球に出で廣野の二壘ゴロに二壘に達し、三壘を盜んだ、千家遊擊を襲ふと丹羽本壘に突入する、遊擊手球を取つて投げたが遲い、千家、山根のバントで二壘に進みパッスボールで三壘、二壘を占める、淡路一壘手の失に生き滿壘となり未だ一死者だから甚だ有望だ、果然衆望を負ふて立つたる岩田痛打三壘手の頭上をブチ拔き千家、山根相ついで生還した、淡路二壘を過ぎ三壘に突進したが惜い事には清水の爲に三壘に刺し止められた、之で三点を加へた、第五回に又もいゝ機會が來た、廣野右翼に大飛球をカッとばすと小島取り損じたので危い命をつなぎ止め、直ぐ二壘を奪ふ、千家のゴロを郡山逸したので廣野三壘を得た千家二壘を安々と頂戴し、快打を待つ、山根の二壘ゴロ犧牲となつて廣野本壘を陷れ、千家三壘に至る淡路又もや三壘を突破し千家悠々としてホームインする、斯くなると流石の一中軍も防ぐ道がない、第六回更に一点を加へ合計八点となつた、然るに彼は矢張一向振はぬ、大抵千家に弄殺せられ、たま〳〵一壘に生きたものも我が堅壘を陷れる事が出來ない、我軍も第八回福田の二壘を突破する愉快な二壘打あつたが後援つゞかず、遂に最後の結果は八對悠で我軍の大勝利は當然の事だ、試合時間一時五十分、渡部君審判の勞を取られた、此日、神尾君及吉川君病氣で出られなかつたので丹羽君、岩田君が之に代つた。

校										
本	田	羽	野	家	根	路	田	田	打擊數四〇	安全打八
	塚	丹	廣	千	山	淡	岩	福	神	三振二 得點八
	6	3	4	1	9	2	8	7	5	盜壘一一 四球二
										失策二
中	山	合	島	木	田	村	飛	水	治	打擊數三一 安全打五
										三振一一 得點三〇
一	郡	河	小	三	西	吉	掛	清	鍛	盜壘五 四球
	6	4	9	2	3	5	8	7	1	失策七

本校		中	得點		一	得點
ヒット	點	ヒット			ヒット	
2	2	1	0	I	1	0
1	0	1	0	II	1	0
2	3	1	0	III	1	0
0	0	0	0	IV	1	0
1	2	0	0	V	0	0
0	1	0	0	VI	0	0
0	0	0	0	VII	0	0
1	0	1	0	VIII	0	0
1	0	1	0	IX	0	0
8	8				5	0

庭球部報

南下戰記

北斗の光芒は永久の使命を啓示すれど北海の波濤は大業の完成に怒號すれど嗚呼生等駑鈍三度吉田の原頭に敗衂の汚骸を曝し辰門史上に屈辱の頁を重ねぬ生等は固より菲才能く其伍に伍ふるものに非さりしも誤りて選に與る男子固より意氣に感ず凛烈の嚴冬東海の濱伊豆の一角に二旬の練習は實に姑蘇の沒落に越人の勝鬨を思へばなりしなり臥薪冷たき夢に入るものは是れ盡きざる先人の鬼哭、朔風膚を裂く冱寒の夕靜勝

館内五回の鍛練は實に雪辱の時を期すればなりしなり生等は努力せり生等にして爲したる努力はなせり努力は之れ責務の凡てなりと噫、然かも嵐山の散る花に京洛の鬼と化せし先人の靈を如何せん七百校友が熱涙を如何せん、生等敢て恥辱を忍んで戰を誌す所以の者は後繼の士の幸に先人の靈を慰め、校友の恩に酬ふるならんを切望すればなり

對五高校（五月三日午後二時―午後六時）

本校　五高

●（島田一宇野）　○三（向芳賀）
●（吉和大西）　◎三（向芳賀）
●（高松増澤）　○三（渡邊行本）
○（泉手平）　●一（渡邊行本）
●（泉手平）　○三（二階堂正林）
●（鳥山金子）　◎三（二階堂正林）
●（寺崎川上）　○三（大槻小林）
●（中西渡邊）　◎三（大槻小林）

午前中雨降りし故コートが濕りてホールは曲（かゝり）す程なり

去歳の恨は吉田原頭蕭殺の風と共に盡きざるなるに又彼五高と茲に戟を交ふるを得るは實に天の與ふる好機なり北陸男兒の意氣の存する所を發露して九州男兒の膽を奪はんとの決心固かりければ場内腥氣充ちて戰はざるに戰士の睚は決して決死の志し凛として奪ふべからず

我が先鋒、島田組精鋭當るべからざるの意氣ありしかども敵の老猾なる未だ容易く侮り難く島田の猛勢も其功なくたゞ徒らに敵の前衛をして名をなさめして退く

吉和組勝誇たる敵と戰ひて善く戰ふ前衛大西の剛氣は敵膽をして寒からしめしかど、天運いたらざるか敵に優待せしむるの止むなきにいたる、高松組渡邊組に破られしかど、泉組たつに及んで形勢一變平手の爲めに敵は幾んど翻弄されて退敗す、敵中堅二階堂組をいだして我に對す、泉勝ちに乘じて一擧立ちに勝二回を收む然れども敵も一方の重鎮や殊死奮戰してゲームツウヲールまで盛り返す、我にして茲に優待せざらんか大勢に關する少なしとせず、泉平手全軍の運命を双肩に荷ふて責や輕からず泉の口は噤まれて平手の頰は緊張しぬアンパイヤーのアレーの宣告と共に第五回目は開始されつ敵サーブにとりて先づ沈着の色あり敵の前衛大膽なるモーションによりて奇功を收め我遂に敗退せり！我遂に敗退せりとは雖も平手の鮮なるモーションとヴヲーレーは敵も味方も嘆賞せし所、我れまづサーブサイドにたちしが大なる敗因たりしは疑ふべくも非ざる也鳥山組泉組の仇を報ぜんと我まづ一勝し彼次で二勝し次で我又勝つゲームはトウヲールとなり戰は將に高調に達せんとす、飽くまで幸運なる彼は又サブサイドにたちて七分の利あり金子のスマッシングアウトが敗因をなして無念ながらも敗退す、我が大將枕を並べて戰死せる敗戰の餘勢を受けて泰然としてたつ北辰の光芒を添ふると否とは實に此の二人者の腕にあり其責や大其任や重、其意氣や壯、噫然かも進んで敵を望めば六組の優侍不戰鶴翼の陣を張りて妄りに牙營を衝き難し退いて味方を顧みんか死屍算を亂して大勢の如何ともすべからざるものあるが如し寺崎先づヴレシーブサイドにたちて勝を一回讓るサーブサイドにたちては阿修羅の一擊ゲームはワンナウルとなる、敵の後衛調子づきて猛球の續發寺崎餘りに慎重なり

し爲めか却りて球延びず豎子をして名をなさしめぬ、殿將中西奮戰力闘せしかど大厦の倒るる一木の如何ともすべからず大勢既に定まりて我再び五高に敗れぬ比叡の嵐は吉田原頭の悲風と荒み加茂の流は惆悵の曲に咽ぶ易水の別を憶ふては壯士の腸を寸斷するの概あり時利あらざれば會稽の屈忍ぶべく博浪沙の一擊功を收め難し、死を期せし十有四名が男泣きは哀れといはんか悲愴といはんか、噫

對大阪高商（五月五日午後一時―午後五時）

本校　大阪高商

○（鳥山 金子三）　●○（谷村 北）　○三（八尾 吉田）

◎（鳥山 金子三）　●一（古川 松本）　◎三（八尾 吉田）

●（中西 渡邊○）　○三（野口 瀬川）　●（高松 增澤二）

●（泉 平手○）　◎三（野口 瀬川）　●（島田 宇野一）

●（寺崎 川上一）　◎三（駒村 森）

●（鳥山 金子○）　◎三（駒村 森）

敵は關西の重たり昨日六高を破りて意氣衝天、鎧袖一觸我を破りて月の桂を頂かんと欲するの意や堅し、我既に五高に破るゝの事なればこの長袖兒を破りて爾來の汚辱を雪ぎ辰門の意氣を示さずんば止まざるの決心あり、先鋒鳥山組先づ敵谷村組を屠りて我軍の爲めに氣を吐く、敵古川組いでて我に向ひ奮闘甚だ力めしかども、決河の勢一支もなくして退敗我先づ優待す、中西組敵野口組と戰ふ我が渡邊の武者振誠に目覺しく、敵野口稍焦り氣味にて我既に勝たんとせしかど天運拙なく彼に勝を讓る、泉組昨の奮闘もあれば我軍望を囑するや大なり

然るに如何せし者か我常に不利の地にたちて腕を振ふの餘地なきに敗退し了んぬ、高松組八尾組に向ふて甚だ優勢殊に敵吉田未だ若輩なれば上り氣味にてミス多し高松又た大に當りロッビングプレーシング自在にして敵の後衞八尾をして顏色なからしめて敵に油の乘れるなる苦戰苦闘ゲームヴウヲールデュス七回もありし後我遂に敗退せり我が精鋭島田組、八尾組にあたる島田の熱球八尾の熱球風を生じ霹靂とよむ必死の龍虎雲を呼び風を起して戰ふに似たり、噫されど戰は依然として我に利あらざりき敵は茲に於て二組の優待をいだしぬ、我軍大將寺崎組駒を陣頭に進め敵も亦大將駒村たてり我先づレシーブサイドに立てり寺崎が巧妙なる駒村をして奔命に勞れしめ前衞森恰かも木偶の如し我易々として一ゲームを得第二回よりして川上の活動目ざましく我幾度か勝たんとせしが機を逸してデウスを重ぬる五回にしてゲームはワンナウルとなる、嗚呼我れにして再び昨の轍を踏まんか何の面目ありて七百の校友に見えんと之れ實に寺崎の頭を支配せる大苦痛なるべし敵の駒村が奔放なる遣口に對して我常に守勢をとりしは其責任を感ずるの餘り大なりしに因するか我又遂に敗れたり優待鳥山組目に餘る敵を前に控ひて悠然戰に就く、彼贅六奴輩何者ぞと金子切齒扼腕してたてども技に於て我と彼とに逕庭あり我又零敗の止むなきにいたる、嗚呼我れ常に意氣を以てたち意氣を以て戰ひしとはいひ技未だ彼に及ばざる者ありしか再び敗れたり、二度戰ふて二度負く戰ふべかりし廣島師範とは雨天の故を以て戰ふ能はず我實に不運なるかな。（正記）

庭球部第七回大會（五月十二日）

繚爛の花吹雪してより初夏新綠の裝に入る五月十二日第七回庭球大會はひらかれた羊毛色の空は降りさうな雨を包は風は枝を鳴らさず葉も動かねど東南より西北にかけて雲は緩やかに動いてる息苦しきまでに壓しつける樣な蒸し暑さには中止といふ危惧の念が起らぬでもなかつたが午前九時より壯快なるゲームが始められた時に思ひだしたやうに風が吹いて大顆な雨をばらばらと落したが大した差支もなくて一般のゲーム二十回頃まで進行した十一時頃から雲は薄墨色に變じて雨は細くふりだして止みさうもなくなつたコートの周圍には雨傘幾つとなく擴げられた然しかゝる場合に於ても辰門健兒の意氣は遺憾なく發揮せられて戰士の熱烈な試合振りは目ざましきものがあつた　雨は漸次烈しくふり注いでボールがカーブしレコートが滑り始めたので午後零時半對外試合を殘して中止するにいたつた。

一般試合（三回ゲーム）

	勝		負	
1	二（棚野巖 石川一佐久）	○	（井上功 石端良平）	
2	二（小原竹内 英靖二）	一	（松井宗一 岩田三央）	
3	二（小和田好次 土肥善三）	一	（川島清 加藤準二郎）	
4	二（兒玉勇 合滿義郎）	○	（井奈清一 不破保充）	
5	二（太田正規 牧野利家）	一	（稻葉龍三郎 大坪武夫）	
6	二（堀朋近 加藤貞國）	一	（鰐淵源 久留眞質）	
7	二（岩田四郎 宮崎孝三）	○	（白井季吉 中村勸）	
8	二（須藤二郎 小坂義雄）	○	（提山西暢 市川理義）	
9	二（青原慶哉 東野市二郎）		（長岡槌之助 東精太郎）	
10	二（平岩健吉 廣野寛）	○	（岩佐剛一 今村眞彥）	
11	二（森長四郎 松岡虎夫）	一	（佐宗直吉 宮井上吉）	
12	二（丹波吾朗 芝俊三）	○	（高見幸二郎 舌野方治）	
13	二（北川榮一 井奈靖）	○	（越喜三郎 大西進）	
14	（山本龍作 長野歲重）	○	（津山玄道 金子要人）	
15	二（北俊一 甲山寬之進）	一	（富岡素一 秋月周三）	
16	二（龍野確 渡邊義道）	○	（東讓吉 大坪不二馬）	
17	二（福田惠三 北岡滿直）	一	（荻原正 高島一郎）	
18	二（橋本榮雄 饗庭光古）	一	（佐治昌次 三上宗輔）	
19	二（竹蓋千代三 平野鐵太郎）	一	（足立秀朗 伊藤博）	
20	二（松原外松 水上勝二）	一	（田淵敬二 福永園松）	
21	二（奥村尚輔 小杉惠雄）	（永田憲雄 松本立也）		
22	二（大橋二郎 石田國廣）	一	（千家鐵麿 神田垂穗）	
23	二（鳥居武雄 山田卓爾）	○	（齋藤權左衞門 本間公義）	
24	二（北條敬太郎 梅谷與七郎）	一	（山根禮 森寬治）	
25	二（湧島宏太郎 小此木繁）	○	（高田昇 末吉治郎平）	
26	二（渡邊退助 山本重晴）	一	（石坂善藏 和田勢一郎）	
27	二（今井剛 大西三郎）	一	（吉利不二根 丸瀨正恭）	
28	二（高松宗直 寺崎定造）	一	（中西賴三 金子正夫）	
29	二（泉孝太郎 宇野義一）	一	（島田節 平手多計比古）	

以上

五月十八日午後二時開會

數日來ひきつゞいた晴天に飛ぶ雲より漏るゝ日光には夏の影が歷然と認めらるゝ今日も亦蒸し暑く雨が降りさうであつたが然し風の吹かない

のと映しい程の光もさゝぬので絶好な庭球日和であつた眠つてる北陸の庭球界は此日に於て目醒しい活動を喚起するのである金城の若武者も老將も鋭鋒を揃ひて集つたのみならず小松からも末頼母しい殿原四騎轡を并べて出陣したいでや其日の戰功を記して後の世の語り草に遺さんかな。

工業（富田　橋田）○　三（今井　大西）

敵が今井の熱球に打ちすくめられたるに乘じて大西の果敢なるモーションが功を奏して譯もなく勝つ。

小中（吉田　田代）　（鳴澤　丸瀬）

鳴澤其正鵠なるコントロールと沈着なる戰ひ振りに敵を散々惱ませしかども敵の前衛田代の敏捷なるモーションに唯彼をして名をなさしむ。

商業（岩越　安宅）　（淺水　櫻井）

其の猛球に於て能く矢面にたつ人なしと稱せらるゝ我が二豪も岩越が軟球のネバリ強きに根氣負けして若冠者に勝を讓る。

工業（木藤　林）　（多和田　大西）

大西再び戟を工業と交ふ木藤戰友の仇と思ふや思はざるや強球を以て多和田を衝く多和田の粘り強き事無比也木藤自滅して一回ゲームを失ふ彼れ陣法の誤れるを見てか小球を以て大西にせまる大西餘りにネットの離れしため兎角ミス勝ちにて敗退の止むなきにいたる然れどもレシブに於ける大西の功は沒すべからざるものあり吾人は熱心の賜がいかに貴きかを明らかに認めざるを得ざりき。

一中（小森　久保）　（今井　山田）

場内稍活氣だちて彌次の意氣昂る我が獰猛組の出陣に對して軍神を祀らんためや　敵の前衛小森の正確なるスマッシンクは能く今井を惱ませしかどサーブサイドにたちては今井は勝算歴々たり彼が左手を腰にして稍沈思せる後鐵欄の一振二振三振四振鐵石亦能く破碎すべしましてや一中の若武者たゞ呆然として零敗す。

一中（上野　長谷）　（高松　金子）

上野如何せしか少し上り氣味にて球延びず高松之に乘じて強球緩球交々送り長谷手を下すべき術もなく哀れや一中の大將も咲き初めしクローバの庭に敗殘の骸を曝しけり。

小中（山下　齋藤）　（塚田　渡邊）

後衛山下打球妙にして折角ブレーシングを爲しながらも球は尻あがりしてアウトを存す前衛齋藤の奮闘ありしにも係はらず敗退せしは山下の負ふ處少なしとせず。

醫專（鈴木　關）　（吉利　永井）

永井練習を休み居りしためスマッシングは確實なりしもモーション遲きため強球鈴木の乘ずる所となりて勝を彼に讓りしは是非もなし。

師範（吹本　青山）　（中西　增澤）

我れ先づ勢可なりしかども敵の後衛の深き球に中西漸次壓迫せられ增澤又活動せず我敗る。

師範（井東　島田）　（島田　渡邊）

敵は北陸の重鎮我も亦新進の剛の者此日第一の見物よと喝采の聲喧噪を極む我まづ一回彼に勝ちを讓りて次に我とる井東のモーション打球の巧妙實に端睨すべからざるものありしかど渡邊の敏慧よく敵を苦しめてゲームはツウヲールとなる島田の目は輝きて觀者片唾を呑んで手に汗を握る、島田愼重に戰ひしかどカウントスリーワンとなり我勢非也、敵の前衛勢に乘じて左側より右側に猛襲を試む我島田電光の如く左側を

拔いてとトウースリーとなる、次の一點は實に生死の別れ目島田井東をバックに廻し猛球を以て衝きしかど敵の老猾ロッビングを以て應じ島田遂にネットして血涙を呑んで敗退す。

醫專（下間 田中）　（泉 川上）

泉日頃の强球に似もやらず田中をさけてロッビングせしため多くはアウトして勢昂らずゲーム既に二ッを獲らる茲に於てか泉陣法を變じて下間を衝き川上又スマッシング當りしかど時機既に遲かりしか徒らに敵をして名をなさしめぬ。

醫專（小島 藤本）　（平手 寺崎）

前後衞入れ代りしとはいひ侮り難き强味を有する平手組に向ふては小島組殆んど物にならず零敗を免れたるは勿化の幸といふべし。

醫專（高倉 河口）　（鳥山 字野）

此時暮靄四邊をこめて時に入りしか鳥の影もなく暗澹たる雲は凄味を加へてボールの行手ラインの程も定かならずされど最後の戰は開始されつ我れまづサーブをとりて攻む前衞の活動は本日中の白眉にして猛烈なるスマッシングと敏捷なるモーション敵高倉をして周章措く所を知らざらしめしも老猾河口又侮り難く殊に日の暮るるに從ふて近視の宇野漸く其の戰鬪力を減じ三對一〇敗退は惜しみても餘りある事なりき。

閉會せしは午後七時なりき。（正記）

遠足部報

木津の桃林を訪ふ

此邊の人は桃といへばすぐ木津を聯想する。河北の木津はどれ位この界隈に知れ渡つた桃の名所である。そんな名高い桃、一度は賞してやるべしと五月十二日（日曜）に一日の清遊を試むることとなつた。ダウマウを以て名高い四高の遠足部も、たまには清遊も宜からうとて。

由來我部の擧は四高八百の健兒にふりかける覺醒劑である、興奮劑である、尙進んで滋養藥—藥といつては語弊があるかも知れんが、その心身の健全分子を增し肥やす要素——である。少くともこの信念をもつてこれまでやつて來た。其實果如何は姑く措くとするも、小は事物實地に就ての活きた學問から、大は自然の懷に入つて心身を鍛錬する等に至るまで、また、動もすれば沈滯し勝ちなる風潮を阻止し、勇健質實、共同一致の氣風を呼び起し、暢達せる心、頑健なる身体の養成等、何れかそれならざるものあらんや。かく各自その身を修め得て後始めて、校風云爲すべく、其發揚に就て談ずべしである。遠足部の隆盛を希ふもの、ひとりわれのみでなからう。

二三日前から其日の空模樣が氣遣はれてゐたが、よくいふ遠足日和といふやつで當日はお誂向の上天氣、微風はあつたがこれとても天公のお慈悲で、河北潟を縱斷する船の進行を助けてくれたのだつた。そのことも考へないで少し位砂塵が立つたからとて、彼此思ふのは親の心子知らずといふものだ。その證據には船脚が速かつたばかりでなく、風あつたために非常に愉快な興を添えていつた。

其日になつて參加する人が突然殖えて九十有幾名、少しく面喰つたが何も好景氣のこと、委員も張合があるといふものだ。爲めに豫め用意して置いた蜜柑に不足を生じ、それを急いで補ふやら、もう出發前に於てからがすでに忙がしかつた。多忙には好景氣が伴ふといふものか、乃至は、好景氣には多忙が伴ふといふものか、何

れその邊のものだ。

市を離れてから翠坡を傳ふこと一里餘、渡場に着くと、さて困つた、豫定の人員間に合ふやうに船の用意はして置いたのだつたが、急に增した人數に對する分の準備に奔走する、どうも忙しいことだが、どうしても間に合ふことが出來乘ぬるやう見える。船が不足だと知ると、委員の言葉も聽かばこそ、われさきにと乘り込んで、仕濟ましたり顏の人も見受けられた。平常何を立派なことをいつて居ても、こんなときにはホントウの地金がわかるらしい。こゝに就ても遠足の効果を否むわけには行かない。心掛けて居る人には、よい修養の機會だもの。

乘り遲れた人々にはお氣の毒だつたが、そこから二町許足を運んで貰つて對岸の須崎から乘船して貰ふこととした。これにて九十幾人が都合八隻の船に分乘して河北潟を縱斷する。順風を帆に孕んで艫聲の割には船あし速く、風波をやぶつて進む。

一体物事に接するとき、目のあたり映ずる有樣に加へて、歷史的事實を聯想すると一層興味を深くすることがあるものだ。河北潟を知つて居て錢屋五兵衞を知らぬものがあつても、五兵衞を知つてゐて河北潟を聞かぬものは多分なからう。五兵衞そも〳〵ケチのつき初めは、全く此潟の埋立計畫に崩して居たのではなからうか。百里を見通し得る眼は偉いには違ないが、千里までも利く眼があるとすれば前者の爲すところがこの眼から見て無謀なことと思はるゝ節もあらう、遠き慮りに缺けて居ると觀らるゝ事もあらうといふもの。

然し百里を觀得る人の爲すことに慊らぬものにも二種あることを忘れてはならぬ。千里も先きを見透す底の人、も一つは一里先きをも分らないやうな人とである。千里の上には萬里、またその上には百萬里、を見得るといふやうに、上には上と限りなくはあるが、或人が或事をなしたときの考に對して、それより今一歩進んだ者、即より以上の達見ある人と、それより劣つた人と、都合三階段に分ち得るわけである。然しときとしては、如何なる人にしてもその時は、それ以上の策がない、即ちそれが絶對的に（時に關して絶對の意にあらず）最上最善の策であると定め得らるゝこともあるには違ないが、河北潟の埋立を日論んだ人はさて、何の部に入るべきだらうか。漁民の物論沸起、金澤に吐瀉病流行の慘狀から、五兵衞獄中の病死、要藏（五兵衞の次男）の磔刑に斃るゝまで、聯想の糸を手繰り行くと、前田綱紀湖館を築いて、機務の暇々に此處に遊びしことの大規模なりしことや、また兵船遊獵船等を繫ぎ、船手卒に舟檝を習はしめたことなどを想ひ出すひまもなく、湖上二時間は、はや過ぎて、船は蓮湖北端の内日角に着いた。怪しげな帆に、チョン髷すがたの船頭さん、何となく隔世の感があつた。

これより木津まで陸ぢを行く。宇野氣を通つて更に北へ北へと進むとそろ〳〵桃花が木の間がくれに見え出して來た、下の麥と、紅綠相映ずる處、只詩囊の豐かならざるを怨むのみである。桃花は今正に七八分の開き、眞の風流は此内に求むべしといふことであつた。單に木津の桃といつても範圍が廣く、方三里にも渡つて居るが、その内にて一目千本ともいふ處としてあるのは即今横山停車場のある附近とのことである。

松濱海岸松並木の間にて汗を引込ませて、それから、横山ステーションを指して歩を移す。同じく桃花を探りに來て居る人多く、風流といへば、分るも分らざるもみな奥ゆかしいやうな氣持の

するものだ。

ステーション近くの掛茶屋に憩ひ、重い思をして持つて來た菓子を分配する。こゝしばらくは花よりおくわし。

此處の桃栽培の起因は知らざれど、近くは天保、弘化、嘉永の頃熾んだつたものだといふ。殊に木津村の室屋久兵衞とかいふ人は良種を遠近に需めて培養し、其實を藩主に献ずるなど御自慢なものだつたさうだ。御一新後は漸々荒廢に嚮く傾きだつたが近頃また、有志等が相謀つて、外國種を移植したりなどして專ら昔日よりも一層立派に爲やうと努めて居る。

こゝに隊を解いて各々自由行動を取れることとした。然し、早く歸らないと、これに來て居る間に二世も三世も代つては大變だといふので、愛を割き、次の汽車では、此處より乘る人、宇野氣よりする人、中には津幡まで歩いてそこより乘つた人もあつたが、皆それ〴〵家路に着いた。

（S生）

ことわり

第一回クロスカントリーレースの事ども、都合により本誌に掲ぐるを見合はせ、部史に載せ置くにとどむ。

遊泉寺に遊ぶ

我部は最後の活動を試みんとして、晴々した る五月の第四土曜に出發して、先づ道を堂村方面にとつた。野田山や筍で名高い別所を經て堂村近傍までは道は登りで太陽は遠慮なく照りつける松蟲が眠さうに鳴くので隨分疲勞を覺えた。それからは犀川の上流で溪流は岩に激して新綠滴らんとし誠に幽邃な景色てあるので一ト休みして居るとやがて相良先生が追ひ付かれて

一團となつて歩み出した。此處で先生はすつかり元氣を回復された。しばらくで堂村へ着く此村は石川縣で最も開けない所で、老婆でも島田に結つて居ると話には聞いたが餘り見當らなかつた。住民は皆炭燒を業として居るが極めて淳朴で道を聞けば馬鹿丁寧に敎へて呉れた一老にネーブルを與へたら必ず博士になると云つた堂村での博士は眞平だ。此村では一時鑛泉でさわいだ事がある、又此村に女を恐れる天狗が今も居るそうである。先發の林先生は村端で一行を待つて居られた、先生は何だか紙包をポッケットから出いて四顧された、受取つて見ると大きい甘子が四尾横つて居た。それから一里ばかりで後谷を左に眺める、此村も堂と相並んで文明の風が周圍の高山の爲めに吹いて來ないので有名である。一行は此處から二千尺餘の峠を越えて、鶴來へ出たが之れは土人も手古摺て居る。吾々は覺悟して、草鞋の紐を結び換へた、經驗ある先生等は辨當を用意して居られた、或る人の如きは空腹で目が廻つて一歩も動けないので民家で御飯を馳走になつて漸く宿へついた。此峠を登り始めると突然スペート先生が上衣を肩に掛けて汗を拭ひつゝ下りて來られた、聞けば先生は鶴來まで車で、それからは案内者もなく此峠を越えられたので先生の地理に悉しいのと健脚とには驚いた、僕等が山の中腹で先生の影が消えるまで見送つて萬歳を叫べば、先生は時々顧みて帽を振つて應ぜられた、先生は隨分遲く歸られたであらう。吾々が岩漏る清水に餐を凌ぎつゝ漸く頂上に達した時には將に夕日が海に沒せんとして居た、前には手取川が蜿蜒と山より出て海に入る全景がわかるし、水田は夕陽を反射して居る、眞に絶景である、傍で誰かが「こんな景色があるから遠足は山に限る」と云つた實に

然うだ高い處より眺めると自然の美を一層深く味ふ事が出來る。峠から鶴來は手にとる樣に見えるので馳せ下るに半時許を費したのである。

一行は海老屋と村山とに分宿して、學校から菓子と果物の御馳走あつて十一時頃靜かに夢路を辿つた。此鶴來町は昔劍と云ひ、白山谷の咽喉で電燈もあれば電話の設けもある、金澤より物價安く金澤より來るものは辨當を用意しないと云ふことである。

白山の雪のうちなる氷こそ
麓の里のつるぎなりけり　（回國雜記）

二十六日　晴

今日も幸に遠足日和（四高の遠足にはめつたに降らない例へ前に雨が續て居ても當日になるとからりと晴れる）で有志者は早起して此處より八丁奥にある白山比咩神社に參詣した。菊理媛神、伊弉諾尊、伊弉冊尊の三神を祀る、國幣小社である、其鎭座は崇神天皇の七年で其社地を船岡山といふ、元正帝の靈龜二年敕して安久濤（クド）の杜に遷し弘化十四年には社殿を白山村に造營したが不幸本社炎上したので今の地に遷座せられたのである。境内は老松古杉鬱蒼として枝を交へて居る樣如何にも神々しい、社前の狛犬は奥州の藤原秀衡の寄附したものと云ひ傳へて居る、何しろ加賀の一ノ宮であるから春と秋は澤山の參詣人がある。僕はどう云ふ因緣か三度目の參拜をなした。又鶴來町のすぐ傍に、七箇用水の水門がある、石川郡の灌漑は主として之が給水を仰ぐのである。一行が此處を辭したのは六時半であつた、町をはなれるとすぐ手取川である、源が白山であるから其水は清い、古は比樂川と云つたのを壽永二年、木曾の追擊隊が此川に來て手に手を取つて渡つたので、遂に手取川と呼ぶ樣になつたと傳へられてある、此沿岸は地質の時代を識別するに必要な動植物の化石を包藏することが頗る豐富で、其種類も多く其形體も完全で保存するによいから、世界の地質學者間に希有の化石產地として知らるゝに至つた。此川は加賀第一の大川であるが植付の爲めに水量が常よりは著しく減じて居る。吾々が天狗橋へかゝつた時に數人の漁夫が一網に七百目餘もある鱒を四ツ捕へたのを見た。此天狗橋は對岸の懸崖絕壁の峭立する天狗壁のつくる所に架せるもので、長さ五百尺、立派なものである、橋麓より山中へ四五町もある廣き隧道があつて川の岸へ通じて居る之れは橋を架する前に渡船場であつた。此近傍の山から石材が澤山出る。之れから三里許の坦道を行くと辰ノ口に着くのである。此途中朝四時に金澤を出立して來た小崎委員が一行に加はつた。君の熱心を多とする。辰ノ口は鹽類泉で客の多くは村夫子で縣下の溫泉場で最も淫靡な所と云はれてある、吾吾はこゝを素通りして和氣へむかつた、此地方は陶器の產出盛である、次に盲谷を經て鵜川村につけば遊泉寺の鑛山は眼前に横つて黑煙を吐いて居る、此處は主に銅で、安永六年の發見開坑にかゝり天明七年業を休んだが文政三年前田氏再興し爾來數度の變遷を經て現今外村氏の手にあるのである。此銅山の主任である近藤工學士は我校出身であるから吾々は多大の便宜を受けたのみならずサイダーと果物との有り餘る御馳走と尙美麗なる鑛山の繪葉書一組づつを惠まれた事は深く感謝する所である。此銅山は七百二十尺の竪坑で百二十尺毎に横坑を穿ち鑛石を運ぶに蒸汽力を用ひ居るも近くは水力電氣を用ひんとて工事中である。其規模の大と機械の新式は縣下其比を見ず。此處で自由解散することゝした、多くの人は輕便鐵道を利用しようとした

が遲くてだめであつた、そこで線路をつたつて二時半小松へ着いた、まだ汽車には時間があるので公園を訪ふた、日比谷公園に似て居る所がある、菖蒲が最盛りで殊に日曜日であつたから澤山な人出であつた、次に小松中學校を訪ふた、折柄記念日で市川海軍少佐の講話あり寄宿舍には各室飾物があつて面白く拜見した、最後に名高い城趾を見た之れは浮城と云つて、小松を貫ひてゐる川をとめると一面に海と化して敵を防ぐのであるさすがの由井正雪も之を見て驚いたと云ふことである、小松で目についたのはドーム式の議事堂である中學の校長さんは東洋に二つ外ないと云つて居られるそうだ中々奇拔なものである、何か記念にせんと所々を見物して居る間に時間がたちいそぎ停車場に至り四時發の汽車に投じた。(たつを)

寄贈雜誌

校友會雜誌　毎號　第一高等學校校友會
校友會誌　毎號　東京高師校友會
六條學報　毎號　佛敎大學壬寅會
十全會雜誌　毎號　金澤醫專十全會
華陽　毎號　岐阜中學校華陽會
麋城　二九號　大垣中學校校友會
校友會雜誌　一七號　大成中學校校友會
一橋會雜誌　毎號　東京高等商業一橋會
同窓會雜誌　一〇號　錦城中學校同窓會
校友會々報　毎號　盛岡高等農林校友會
校友會々誌　毎號　金澤第二中學校友會
尙志會雜誌　毎號　第二高等學校尙志會
校友會々誌　毎號　第六高等學校校友會
輔仁會雜誌　毎號　學習院輔仁會
東洋時論　毎號　東洋經濟新報社
龍南會雜誌　毎號　第五高等學校龍南會
學友會雜誌　二五號　石川師範學友會
以文會誌　毎號　京都帝國大學以文會
嶽水會雜誌　毎號　第三高等學校嶽水會
雄辯　毎號　大日本圖書株式會社
帝國文學　毎號　同　上
水曜會雜誌　九號　京都理工科大學同會
親友會雜誌　一五號　柏崎中學校親友會
校友會雜誌　四八號　金澤第一中學校友會
校友會雜誌　記念號　石川縣工業校校友會
校友會雜誌　一二號　金澤商業學校校友會
學友會雜誌　毎號　七高造士館學友會
校友會雜誌　毎號　三重一中校友會
坂東太郎　五五號　前橋中學校學友會
校友會雜誌　毎號　千葉中學校校友會
校友會雜誌　三七號　麻布中學校校友會
學友會雜誌　二〇號　新發田中學校學友會
養德　毎號　養德社
校友會雜誌　二七號　京華中學校校友會
學友會雜誌　三號　廣島高等師範校友會
校友會々誌　毎號　有恒學舍學友會
同窓會雜誌　一五號　高知一中同窓會
學友會雜誌　記念號　札幌中學校學友會
校友會雜誌　一七號　德山中學校校友會
校友會雜誌　一號　米澤高等工業校友會
學友會報　毎號　山口高等商業學友會
向洋　一一號　延岡中學校校友會
白峰　一一號　小松中學校校友會
校友會雜誌　二五號　京北中學校校友會
校友會雜誌　一五號　飯田中學校校友會
ゴキソ　六號　名古屋高工學藝部
之餘會報　七號　七尾中學校之餘會
桐陰會雜誌　四九號　東京高師附中桐陰會
校友會雜誌　五號　第八高等學校校友會

鯉城　二一號　廣島中學校校友會
校友會雜誌　三五號　彦根中學校校友會
七生　三〇號　桦築中學校七生會
六稜　三八號　北野中學校校友會
會誌　記念號　粮原中學校學友會
城北　五二號　東京四中校友會
商海　三五號　大阪高等商業校友會

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る
一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せず
一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載せず

明治四十五年六月二十一日印刷
明治四十五年六月二十四日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市宮小町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會